

ソ連という社会体制は何だったのか

——マルクス・エンゲルスとスターリン主義——

小 松 善 雄

目次

- ソ連型社会主義はなぜ、自壊したのか
 - はじめにに代えて——
- ヴィリッヒ=シャッパーの兵営共産主義像
 - 共産主義者同盟の解散をもたらしたのもの——
- バクーニン=ネチャーエフの兵営共産主義
 - 第1インターナショナルの解体をもたらしたのもの——
- バクーニン=ネチャーエフとドストエフスキー
 - 『悪霊』と『未成年』にみる社会主義者像——
- スターリンの農業集団化とソ連型兵営共産主義の確立
 - ソ連型社会主義の崩壊をもたらしたのもの——
- むすび

I ソ連型社会主義はなぜ、自壊したのか

——はじめにに代えて——

2008年世界同時不況が底の見えないまま深刻化し、先進国・新興国・開発途上国のすべてにおいて大量失業問題、貧困問題に喘ぐという渦中であって、金融資本主義の限界が語られ新資本主義が模索されつつある。だが、21世紀は資本主義という社会体制のうちでの進化しか期待できないのであろうか。社会主義というオルターナティブはないのであろうか。

20世紀において本来のマルクス主義に立脚して社会主義の思想・理論と運動を再建し発展させることを志すとき、まずもってなされなければならないのは、ソ連型社会主義の崩壊は「マルクスの誤算」(文藝春秋編『マルクスの誤算』1990年、文藝春秋)を示現するものであり、「『マルクスの歴史』は終わった」(同著、帯)と断定できるのかという、俗論であるとはいえ看過しえない根本問題への解答によってソ連型社会主義の崩壊は「マルクスの誤算」といったものではなく、したがって「マルクスの歴史」はいまだ終わっていないという前提的認識を確立しておくことでなければならないであろう。

同書の巻頭論文「『倨傲の宗教』の終焉」(初出：『諸君!』1990年1月号)において林健太

郎氏は「共産主義は完全に失敗したのであるから」（同書所収，36ページ），批判は必然的にマルクス主義に及ぶとして，以下のように記している。

「ブレジンスキーの『大なる失敗』はブレジネフ時代において行き詰りに達したソ連共産主義体制の構造的欠陥を的確に描きそれを理論的に考察した好著である。ゴルバチョフがその『ペレストロイカ』に乗り出したのは必然であり当然であった。それは主としてスターリン主義の批判と修正という形で行われているが，それはスターリン主義に止まらずレーニン主義にまで及ばなければならないとブレジンスキーは言う，それは全くその通りである。しかし私は更に進んで，レーニン主義への批判はマルクス主義への批判にまで及ぶべきものであると考える」（同，30-31ページ）。

すなわち林氏はマルクス，レーニン，スターリンを同一線上にあるもの，同一基盤に立つものとみなして，スターリン主義批判はレーニン主義批判を呼び，レーニン主義批判はマルクス主義批判にまで貫徹されなければならないという。

林氏の一種のドミノ理論的論法——マルクスとレーニン，スターリンを同一視して，スターリン，レーニンを叩くことによってマルクスを一挙に葬ってしまう論法は，アンチ共産主義理論家の常套的手法であるが，先進諸国の労働者階級，一般市民でも，林氏ほどの苛烈さはなくともソ連の崩壊はマルクス主義が誤っていたことを示すものだという想念を抱いている人が大多数であろう。

では，これに対してマルクス経済学者はどう答えているであろうか。

マルクス経済学の権威七氏——高橋正雄，大内秀明，鶴田満彦，伊藤誠，降旗節雄，富塚文太郎，山口重克（言及順）との面談をまとめた同書所収の第二論文「マルクスは死んだのか」（初出『文藝春秋』1990年1月号）で，斉藤精一郎氏は「私が今回面談した七名のマルクス経済学者はいずれも現在のソ連・東欧情勢の変化を『社会主義の失敗』ではなく，『ソ連型社会主義の破綻』とみている」（同，48ページ）。

この把握は正しいとしても問題は残る。というのは，この把握が説得力をもつには，一步踏み出て積極的に本来のマルクス主義，すなわちマルクスのマルクス主義の社会主義像はレーニン主義の社会主義像とどう異なるのか。はたまたスターリン主義の社会主義像ともどう異なるかを明らかにしなければならないからである。そこで，ここでは三つの論点——(1)マルクス・エンゲルスのロシア共同体論・ロシア革命論とプレハーノフ，レーニンのそれとの相違，(2)マルクス・エンゲルスの社会主義像とプレハーノフ，レーニンの社会主義像との相違，(3)マルクス・エンゲルスの「兵営共産主義」論によるスターリン主義の評価を取り扱うことにする。

そのうち，第一，第二の論点はこの「はじめに」で略述し，本文において第三の論点を掘り下げてみたい。

ロシアにおける社会主義への道をめぐるマルクス、エンゲルスとロシア・マルクス主義
 さて、まず、第一の論点であるが、これに関わるこのアルバイトの日本におけるマルクス・ルネッサンス期に著わされた田中真晴『ロシア経済思想史の研究——プレハーノフとロシア資本主義論史』（ミネルヴァ書房、1967年、以下、『研究』と略記）、保田孝一『ロシア革命とミール共同体』（御茶の水書房、1971年、以下、『共同体』と略記）、とりわけ和田春樹氏の『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』（勁草書房、1975年、以下、『革命ロシア』と略記）によってロシアにおける社会主義への道をめぐるマルクス、エンゲルスとプレハーノフ、レーニン、スターリンの決定的相違として解明されている。そこで「本書は[……]ナロード主義の側からマルクス・エンゲルスのロシア論をとらえ、さらに、ロシア・マルクス主義、プレハーノフ、レーニン、スターリンを批判的に検討するという一貫した試みとして独自性を主張するもの」（「あとがき」469-470ページ）であるといわれる、和田氏のこの労作によってその相違をみておこう¹⁾。

ここで一言しておきたいのは第一論点に関し、なぜ、和田氏の労作に依拠して検討するかである。それは山之内靖氏が「書評 和田春樹著『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』（東京大学社会科学研究所紀要『社会科学研究』第28巻第6号、1977年）においていわれているように「本書はその『序——従来の研究資料』をみただけでも明らかなように、まず研究素材の徹底的な掘り起こしという点で従来のレヴェルをはるかに超える新しい領域を開拓した」（同、320ページ）によるもので、その到達点は現在でも超えられていないからである。

もっとも叙述は論点の解明に即しておこなっているので、和田氏の著書の構成のままではない（なお、紙面の都合上、マルクス・エンゲルスの引用文およびプレハーノフの引用者文二箇所、レーニンの引用文2箇所以外、和田氏の掲げる出典などの注記は省略しているので、当該書を参着されるようお願いしたい）。

[マルクスとロシア革命]

さて、マルクスがロシア研究を本格的に開始する直接的契機となったのは『資本論』第 部刊行後の1868年10月初め、ダニエリソン（筆名、ニコライオン）が『資本論』の刊行計画についてマルクスに問い合わせの手紙を送り両者の知的交流がなされるようになったことにある。この手紙に対し、マルクスは『資本論』第 部はそれだけで「まとまった全体」をなしているので、第 部を待たずに翻訳を進行させてほしいと返答。これによりロシア国民が『資本論』

1) 和田氏のこの労作に対する主な書評としては、この山之内靖氏、後出の田中真晴氏のほか、中山弘正氏のもの（明治学院大学明治学院論叢『経済研究』第233号、1975年9月）、淡路憲治氏のもの（『歴史学研究』1976年6月）がある。

このうち淡路氏は——本文でもふれる——「1875年の（「ロシアの社会状態」——引用者）エンゲルス説はマルクスとの共有のものであることを力説される。この和田氏の主張は、わが国の従来の研究史の空白を埋めるものであり、本書の重要な功績の一つである」（同、73ページ）と和田氏のマルクス、エンゲルス共同創造説の主張を承認されている。

を最初に翻訳した外国国民になる。

ほぼ一年ぶりの1869年10月、ダニエリソン（筆名、ニコライオン）がフレロフスキーの新著『ロシアにおける労働者階級の状態』を送ってきたことがマルクスにロシア語を習得する決心を立てさせる。

1870年、ダニエリソンの友人であり『資本論』ロシア語刊行をめざす中心人物であった革命家ロパーチンがロンドンのマルクスを訪問、チェルヌイシェフスキーの流刑の話などを聞くなか、チェルヌイシェフスキーへの関心を高めたマルクスはジュネーヴで刊行されていた『チェルヌイシェフスキー著作集』を入手し、そこに収められた『ミル経済学概説』、『ミル『経済学原理への評解』』を読了し、とりわけ以下の一節に共感を示す。

「奴隷労働は、それが都合のよい生産形態であることをやめてから数百年も、習慣の力で維持されていたのだが、ヨーロッパの先進諸国における雇傭労働の形態もひょっとするとかなり長く——あるいは数十年、あるいは数世代も——維持されるかもしれない。将来についての問題で決定的にみることができるのは、事物がその発展の必然性によってその方に向っている目標だけであり、その目標を達成するのにどれだけ時間がかかるかということは数学的正確さをもって見抜くことはできない。……それ [= 抽象的な定式] はただ事実に対して——お前は過ぎ去りつつある、お前の場所は他の事実によって取って代わられつつある——というだけだ。それはただ——現在の事態によって、何々の事実のうちに、何々の変化が起こるだろう——というだけだ。だが、いつ、それが起こるか、この定式はそれを述べていない。ひょっとすると明日、ひょっとするとあまりすぐでない。生理学は、われわれの各々にいう——『お前は死ぬ』と。だが、いつ、われわれのうちの誰が死ぬか——生理学はそれを述べない。それは、まだ正確に決定できない事情によって決まることだ」（『革命ロシア』、33-34ページ）。

チェルヌイシェフスキーの理論的活動へのマルクスの探索はさらに続き、72年にジュネーヴでた共同体に関する論文集を読破、そのうち「男爵アウグスト・フォン・ハックストハウゼンによるロシアの内情、国民生活、とくに農村諸制度に関する研究」と「共同体的所有に対する哲学的偏見の批判」の2論文に注目、とくに後者について数多のアンダーラインを引いて賛意を表わしている。

それについての和田氏の要約と評価は、以下の通りである。

「この論文のなかで、チェルヌイシェフスキーは、シェリング、ヘーゲルにより『発展の最高段階は形態的にはその端緒に合致する』とのテーゼを立て、これを自然現象、社会現象について検証したあとで、イギリスとニュージーランドの社会発展の相関関係を念頭におきながら、次のように述べている。

『(1) 一定の国民における一定の社会現象が高度の発展段階に達すると、他の、遅れた国民におけるこの段階までの現象の進行は先進国民におけるよりはるかに急速になしとげられうる。

……

(2) この促進は先進国民と後進国民との接近を通じてなされる。

(3) この促進は、後進国民において一定の社会現象の発展が先進国民の影響のおかげで、中間段階を避けて低い段階より直接、高次の段階へ跳び越えることにある。……

(4) そのように促進された発展の進行のもとでは、後進的であり、先進国民の経験と科学を利用しうる国民の生活が抜していく中間段階は……論理的モメントとしての理論的存在をなすにすぎない。

チェルヌイシェフスキーは、ロシアは先進西欧における発展を条件として共同体的土地所有より社会主義へ『跳び越える』ことが可能だと考えたのである。『歴史は祖母のごとく末の孫を溺愛する』。それは、おそく来たもの (Tarde venientibus) には、西ヨーロッパが砕こうとして指を痛めた骨 (ossa) ではなく、骨髓 (medullam ossium) を与えるのだ。[……]

全体として、彼は、ゲルツェン、バクーニンのスラヴ主義的な、文化的なナロードニキ主義とはちがうチェルヌイシェフスキーの経済学的ナロードニキ主義にふれて、その主張の多くを合理的・説得的なもののみだと考えられる。彼は、先進西欧の存在を条件に後進国ロシアが共同体を基礎に社会主義へ進む可能性を認めるにいたったのではないか。彼は視野が開かれる思いであったろう(同、43 44ページ)。

1873年1月18日付のダニエリゾーンあての手紙でチェルヌイシェフスキーの「著作の大部分は私に知られている」とまで書きうるようになったマルクスは75年、コーシエレフの『ロシアにおける共同体的土地所有について』、バクーニンの『国家制と無政府』の付録A、エンゲリガルトの論文「ロシア農業の諸問題」、政府刊行物の『直接税委員会報告書』などについてノートを取り、77年以降、ヴァシリチコフの『ロシアと他のヨーロッパ諸国家における土地所有と農業』、ソコロフスキーの『ロシアの北部における農村共同体の歴史概説』に書き込みとノートをとるなどして共同体的土地所有の実態についての研究を深めていく。

こうした蓄積のうえに立って1877年、ジューコフスキー vs ミハロフスキー論争に触発され、マルクスは「『オテーチェストヴェンヌイエ・ザピスキ』(『祖国雑記』) 編集部あての手紙」を書き、ゲルツェンの共同体論とチェルヌイシェフスキーの共同体論とを俎上にのせ、自らの評価を明らかにするとともに、『資本論』第一部第7篇第24章「いわゆる本源的蓄積」の章の読み方を指し示している。

そこでまず前半(一)のゲルツェンのチェルヌイシェフスキーの共同体論であるが、マルクスは『資本論』ドイツ語初版の「補注」において「美文家ゲルツェンのどういう点を、私はそこにおいて非難しているのでしょうか」と問いかけ、以下のようにいう。「それは彼がロシアの共同体をロシアにおいてではなくて、プロイセン政府の参事官ハックストハウゼンの書物のなかに発見したことです。また彼の手中にあっては、古い腐敗したヨーロッパは汎スラブ主義の勝利によって新しい生命を与えられねばならないということを証明するための論拠としてだけ、ロシアの共同体が役立てられていること、これでありませう」(『マルクス・エンゲルス全集』

大月書店。以下『全集』と略記。訳文を変える場合がある。第19巻、114-115ページ)。

他方、チェルヌイシェフスキーの共同体論に関しては、以下のように述べる。

『資本論』ドイツ語第2版の『あとがき』[.....]のなかで私は、ある『ロシアの偉大な学者で批評家』[エヌ・ゲ・チェルヌイシェフスキー]について、彼にふさわしい深い敬意を払いながら語っています。この人物は、その注目すべき諸論文において、次のような問題を論じています。すなわち、ロシアは、その自由主義的経済学者が望んでいるように、農村共同体を破壊することから始めて、その後に資本主義制度に移行しなければならないのか、それとも逆に、ロシアは、この資本主義制度の苦しみを味わうことなしに、自己の固有な歴史的諸与件を発展させていくことによって、資本主義制度の全成果をわがものにすることができるのか、と。彼は、後者の解決方法に賛意を表明しています。だから、わが尊敬すべき批評家が、この『ロシアの偉大な学者で批評家』にたいする私の敬意から、この問題について私は彼[チェルヌイシェフスキー]の見解に同意しているのだという結論を引きだしたとしても、それは、『美文家』の汎スラヴ主義者にたいする私の論争文から、私が右の見解を拒否しているのだという結論を引きだすのと、すくなくとも同じ程度に根拠のあることだったであります」(同、115ページ)。

これで見ると、マルクスは『資本論』ドイツ語初版における「美文家」ゲルツエンの汎スラヴ主義に対する論争文から「右の見解」——チェルヌイシェフスキーの見解を拒否しているのだという結論を引き出すのも、『資本論』ドイツ語第2版の「あとがき」における「ロシアの偉大な学者で批評家」チェルヌイシェフスキーへの深い敬意から、共同体の問題についてチェルヌイシェフスキーの見解に同意しているという結論を引き出すことも『資本論』文献からは「同じ程度に根拠のあること」だという。だが、チェルヌイシェフスキーを「偉大な学者で批評家」と位置づけ、ゲルツエンを貶視の気味合いのある「美文家」としているのであるから重心がチェルヌイシェフスキーのほうに傾いていることは否めない。

さて、『資本論』文献上ではどちらも根拠があるといってもマルクスはこれに止まらず、明確にチェルヌイシェフスキーの結論の立場に立ち、つぎのようにいう。

「最後に、私は、『何にせよ推測に』まかせたまま残しておきたくないで、率直に述べましょう。事情についての十分な知識をもってロシアの経済的発展を判断できるように、私はロシア語を学び、その後長年にわたって、この問題に関係のある政府刊行物や他の刊行物を研究してきました。私が到達した結論は、次のとおりです。もしもロシアが1861年以来歩んできた道を今後も歩みつづけるならば、ロシアは、歴史がこれまでに一国民に提供した最良の機会を失ってしまい、資本主義制度の宿命的な有為転変のすべてにさらされることになるであろう、ということ、これです」(同、115-116ページ)。

すなわち1861年の皇帝アレクサンダー2世による農奴解放以降、資本主義の本源的蓄積の過程に入ったロシアがその歩みを進めるならば、「資本主義体制の苦しみを味わうことなしに、

自己の固有な歴史的諸与件を発展させていくことによって、資本主義制度の全成果をわがものにする事ができる」「歴史がこれまでに一国民に提供した最良の機会」が失われ、「資本主義制度の宿命的な有為転変」にさらされるのというのである。だが、この一文は事態の進行に対して手を拱くしかないという諦念を表明したのではなく、和田氏はこれは「イソップの言葉」（『革命ロシア』、109ページ）であるとして、そこには次のようなメッセージが込められているという。「ロシアでは1861年以来、資本主義が発展している。それが進めば、共同体は分解し、共同体にもとづく社会主義へ進む可能性は失われる。だから、ロシアの人びとよ、『歴史がこれまでに一国民に提供した最良の機会』を逃すな、それはあまりにも惜しいことである」（同、109ページ）。

「私の到達した結論」がこのような反語的論述を内含するものであることは、後半の（二）本源的蓄積の章に関して、イギリス型の本源的蓄積が「西ヨーロッパ」に限定されることを明示した『フランス語資本論』からの引用をおこない、ロシアにおいてイギリス型の農民層分解による資本主義の道を辿るとみなすことは「私の歴史的素描」を「歴史哲学的理論に転化するもの」とであると抗議の言を付していることによってもうかがわれる。

「本源的蓄積に関する章は、西ヨーロッパにおいて資本主義的経済秩序が封建的経済秩序の胎内から生まれ出てきたその道を跡付けようとだけするものであります。したがって、それは、生産者をその生産手段から分離させることによって前者を賃労働者（言葉の近代的な意味でのプロレタリア）に、後者〔生産手段〕の所有者を資本家に転化させた歴史的運動を叙述しています。この歴史においては『形成途上にある資本家階級によって上昇の槓杆として役だつすべての変革が時代を画するものであるが、とくに、多数の大衆から彼らの伝来の生産手段と生活手段を奪い去ることによって彼らを不意に労働市場に投げ込む変革が、そうである。しかし、この発展全体の基礎は、耕作者の所有剥奪（エクスプロプロリアシオン）〔収奪〕である。これが根本的に遂行されたのは、まだイギリスにおいてだけである。……だが、西ヨーロッパのすべての国もこれと同一の運動を経過する』等々（『資本論』、フランス語版、315ページ）。
[……]

ところで、わが批判家は、この歴史的な素描をロシアに対してどのように適用することができたでしょうか？ ただ、次のようにです。もし、ロシアが西ヨーロッパ諸国民に習って資本主義的国民になることをめざすならば——近年、ロシアはこの方向をめざして多大の労苦を払ってきたのだが——、ロシアは、あらかじめ農民の大部分をプロレタリアに転化することなしにはそれに成功しないであろうし、ついで資本主義制度の懐にひとたび引き込まれるや、他の聖ならざる諸民族と同様に資本主義制度の無慈悲な諸法則に服従させられるであろう、ということ、ただこれだけであります。しかし、これでは、わが批評家（ミハイロフスキー——引用者）にとっては足りないのです。西ヨーロッパでの資本主義の創生に関する私の歴史的素描を、社会的労働の生産力の最大の飛躍によって人間のもっとも全面的な発展を確保するような経済

的構成体（フォルマシオン）に最後に到達するために、あらゆる民族が、いかなる歴史的状況のもとにおかれていようと、不可避に通らなければならない普通的発展過程の歴史哲学的理論に転化することが、彼には絶対に必要なのです。しかし、そんなことは願ひ下げにしたいものです（それは、私にとってあまりにも大きな名誉であると同時に、またあまりにも大きな恥辱というものです）」（『全集』第19巻，116-117ページ。ただし、訳文は和田氏に従って修正）。

そして一国資本主義の構造的特殊性＝類型的特質の把握こそが「鍵」であるという分析方法への示唆をもって手紙を結ぶ。

「したがって、いちじるしく類似した出来事でも、異なる歴史的環境のなかで起こるならば、まったく異なる結果を導き出すのです。これらの発展のおのおのを別個に研究し、しかるのちに、それらを相互に比較するならば、人はこの現象を解く鍵を容易に見出すであります。しかしながら、超歴史的なことがその最高の長所であるような普遍的歴史哲学理論という万能の合鍵によってはけっしてそこに到達しえないであります」（同，117ページ）。

だが、この手紙は『祖国雑記』編集部へ発送されず、1886年になってようやく公表される。

さて、この『祖国雑記』編集部への手紙において公然と語られた農村共同体を通じて社会主義への道という革命路線は、1881年2月のヴェーラ・ザスリーチのマルクスあての手紙への回答——「マルクスのザスリーチへの手紙草稿」において詳細に考察されることになる。

だが、この手紙に入るまえに、若干、そこに至るロシア側の事情とマルクスのロシア研究事情とを見ておく必要がある。

ロシア側の事情で決定的なのは、1879年4月のソロヴィーヨーフによる皇帝アレキサンダー2世狙撃事件ののち、「土地と自由」結社がツァーリズム専制のもとでは合法的闘争が不可能であるがゆえに、政治的テロル、政治闘争を革命の起爆剤として推進する、ロパーチン、ティホミロフ、ヴェーラ・フィグネルら「人民の意志」党とプレハーノフ、アクセリロート、ザスリーチらの政治テロル、政治闘争を否定して農村工作を重視する「土地総割替」派とに分裂したことであるが、これに関してはマルクスは「人民の意志」党を高く評価するが、「土地総割替」派には否定的であったといえる。

つぎにマルクス側のロシア研究事情では、1879年9月、コヴァレフスキーから献呈された新著『共同体的土地所有——その分解の原因、過程、結果』第1部を読んで詳細なノートをつかったこと、1880年にバルイコーフ他共同編集の『農村土地共同体研究資料集』第1巻からの抜書きの作業がおこなわれていることが特記される。そのうち『コヴァレフスキー・ノート』はザスリーチへの手紙における共同体把握に貢献するものがあっただけに、和田氏による大要紹介をみておこう。

「本文、全九章についてのマルクスの詳細なノートを見ると、[.....] コヴァレフスキーの共同体的土地所有分解論をマルクスが基本的に肯定的に評価していることが知られる。とくにコヴァレフスキーが氏族共同体の分解の結果として複合家族が生まれたとする点は、モルガンの

『古代社会』の分析とも合致して、それまでのマルクスの見解を逆転させるのに貢献したことは、すでに有名である。もっとも、マルクスは、そのノートのなかで、コヴァレフスキーに対して批判的コメントも加えており、たとえば氏族共同体の分解にあたって、コヴァレフスキーが『血縁意識』の弱化をその原因ととらえるのを批判して『実質的な空間的分離』をこそ重視すべきだと主張している。

また、コヴァレフスキーは、序章でははっきり指摘しなかったが、インドに残る共同体の諸形態を発生順に整理した第三章では、土地の割替をおこなう共同体の内部における異なった類型の存在を指摘している。マルクスは、この点にコヴァレフスキーよりもさらに重要な意義を与えている。マルクスのノートを引こう。

『(5) 共同体の土地の多少とも定期的な割替制度等、当初は割替は一様に屋敷地 [付屬地をふくむ]、耕地、採草地に及んでいる。長期の過程がはじめは屋敷地 [住宅に隣接する畑その他をふくむ] を私的所有に分出させ、のちに耕地と採草地も私的所有に分出させる。古い共同所有制度から美しき遺物 beaux restes としてのみ残っているのは共同地 [.....] と家族的共同所有だけである。しかし、この家族も歴史発展の過程によって、現代的意味での私的な個別の家族にますます帰着していく。』(『革命ロシア』, 142-143ページ)。

もっともマルクスは「コヴァレフスキーのメキシコとペルーの記述から農村共同体の生命力をさらに強調するようにノートしていることがうかがえる」(同, 144ページ)。

なお、「住民のあいだに私的不動産所有を暴力的に確立することを主張する人びと」の土地私有は国の生産性を上げるとする理論は、植民史からこれを裏付ける事実を挙げることはできないというコヴァレフスキーの記述を、マルクスは「土地私有の導入」が農業生産性を高めるための「無謬の万能薬」だと「叫び立てているのは西ヨーロッパの経済学者だけでなく、東ヨーロッパのいわゆる『文化的階層』もだ」とまとめている(同, 145-146ページ)。

それでは「ザスリーチへの手紙草稿」に入ろう。マルクスのザスリーチへの手紙草稿は第一草稿、第二草稿、第三草稿があるが、和田氏は「農耕共同体 (commune agricole) 概念の仕方」に注目して、第二草稿が最初に書かれたのち、第一草稿、第三草稿の順で書かれたとみる日南田静真氏の見解(福富正実論文への「コメント」, 『マルクス・コメンタール』, 現代の理論社, 1973年)を採用して考察を進める。

この手紙についての和田氏の創見は、マルクスは「ロシア一國革命の先行」による共同体の再生を打ち出しているという主張である。すなわち氏は「第一草稿」を検討するなか、まず共同体再生に対してロシア革命のもつ位置づけの変遷を指摘する。

「第三節では、マルクスは、前節の一般論をふまえて、ロシア共同体の構造上の形態と歴史的環境、そこからくる発展の能力を論じている。[.....]

() 『ロシアは『農耕共同体』が今日まで全国的な規模で維持されているヨーロッパ唯一の国である』。

() ロシア共同体の構造上の形態——(1) 土地の共同所有が集团的な生産と領有の自然的な基礎をなしている。(2) 農民がアルテリ契約に慣れていることも、分割労働から集団労働に移行するのを容易にする。(3) すでに共有の草地において、また干拓その他の一般的利益のための事業において、ある程度まで集団労働を実行している。

() 『歴史的環境』——(1) ロシア農業の危機を打開するには、大規模に組織された共同労働への移行が必要であるが、そのことを可能にするような物質的条件は資本主義制度のつくり出した技術的成果として与えられている。(2) 最初の設備費は『ロシアの公衆』がこれを負債の返却として支払う。『ロシアの公衆は、こんなにも長いあいだ、この『農村共同体』の負担で生存してきたのであり、また、いまなお、そのうちに自己の『再生の要素』を求めなくてはならないからである』。(3) 共同体のこのような発展は、現代の歴史的潮流に照応する。その証拠は、欧米諸国における資本主義的生産の『宿命的な危機』である(同、178-179ページ)。

このマルクスの主張を受けて和田氏はいう。

『先進西欧の存在を条件として、ロシアの共同体が飛躍できるというのは、マルクスが1872年末-73年初めに読んだチェルヌイシェフスキーのロシア共同体論であった。[.....]

しかし、その後のマルクスの考えは変化した。1878年『『祖国雑記』編集部あての手紙』では、マルクスは条件について触れなかったが、この草稿では、西欧における資本主義の技術的成果と資本主義的生産の危機の二点を指摘している。ここには、西欧プロレタリア革命についての論及は一切ない。明らかに認識は、同じチェルヌイシェフスキー的論理の枠のなかで、ロシア革命の自ら救う力を尊重する方向に逆転しているのである(同、179ページ)。

そしてこうした把握にもとづいて、第5節を以下のように要約したうえで、氏自身の結論が引き出されていく。

『第5節で、マルクスは、共同体をめぐる対抗を指摘する。第一は、『社会の新たな柱石たち』、『利権屋たち』のねらっている道で、それは、『共同所有を廃止し、農民のうちで多少とも生活にゆとりのある少数者を農民の中間階級に仕立てあげ、そして大多数の農民をただのプロレタリアに転化すること』である。彼は、共同体の現状でぼろ儲けをしてきた勢力が、耕作者の貧困、土地の荒廃、あいつぐ飢饉、農業生産の後退、穀物輸出の減退という現実を前に、これまでは『金の卵を生んでくれる牝鶏』であった共同体を打ちこわし、収奪の『新しいやり方』を求めようとしているとみている。[.....]

当然ながら、これに対抗する第二の道は、共同体を救うロシア革命の道である。マルクスはいう。『ロシアの共同体を救うには一つのロシア革命が必要である』。『もしも農村共同体に自由な飛躍を保障するために、革命が全力を集中するならば、ロシア社会の知性ある部分が

ロシアの知性とその国のすべての生命ある勢力を集中するならば、農村共同体はまもなくロシア社会を再生させる要素として、資本主義制度によって隷属させられている諸国に優越する

要素として、発展するであろう』。

この名高い結論において「なによりも注目されるべきは、この結びで、マルクスがロシア革命の結果、共同体にもとづくロシア社会の再生が進めば、ロシアは資本主義制度によって隷属させられている他の諸国に優越すると、ロシア一國革命の先行というイメージを提起していることである」(同, 181 182ページ)。

しかし、結局、三つの草稿に展開された思想を盛り込んだ詳細な回答はおこなわれず、きわめて簡単な回答が現行の手紙本文としてザスリーチに送られることになったが、その理由を和田氏は「マルクスは『第三草稿』執筆中に——『人民の意志』党には『論稿』を与えるが、『ザスリーチとその背後にある『土地総割替』派に対して彼らの手によって公表されるような文章を与えることはできないと考えるにいたったとみるのが自然」(同, 184 185ページ)と想定している。

しかし手紙本文でも第一草稿に認められた思想は鮮明であるとして、以下のように、その要約と評価を与えている。

『手紙本文』の内容を意味するところをまとめておこう。

(1) マルクスは、公表を予定した『手短かな説明』を与えることを断っている。含意としては、この手紙自体も公表してくれるな、ということである。

(2) 『資本論』に示されている『耕作者の収奪』の分析は、ロシアの農民、彼らの共同体的土地所有の運命には適用できない。

(3) 共同体は『ロシアにおける社会的再生の拠点』であり、それがかかるものとして機能するためには、まず、外から『共同体に襲いかかっている有害な諸影響』を排除し、自生的発展 un développement spontane の正常な諸条件をこの共同体に確保することが必要であろう』。

この結論は、『第一草稿』に述べられたマルクスのロシア論、ロシア革命論のもっとも簡潔な表現である。『自生的』といい、『自然発生的』といい、ロシア革命の自ら救う力への期待は『草稿』におけるよりも強く述べられているといえよう」(同, 185 186ページ)。

それではこのザスリーチへの手紙本文と草稿はどのような運命を辿ることになったか。この追跡は後にみることにして、ここではエンゲルスの共同体論・ロシア革命論をフォローしておこう。

[エンゲルスとロシア革命]

さて、エンゲルスがロシア共同体論・ロシア革命論を最初に展開した文献は、1874年5月から1875年4月までに執筆された「亡命者文献」である。すなわちその第3論文が1874年に刊行された『ロシアの社会革命青年に次ぐ』パンフレット「ロシアにおける革命的宣伝の任務について」において、ラヴローフがマルクス・エンゲルスの著作「社会民主同盟と国際労働者協会」(=『インターナショナルに対する陰謀』)におけるバクーニン主義批判に対してはバクーニン主義との調停をはかる折衷主義者としてふるまいながら、トカチョーフの『ロシアにおけ

る革命的宣伝の任務 雑誌「フベリョート」編集者への手紙」を批判する段になると、「社会民主同盟と国際労働者協会」の見解と瓜二つのことを主張し、「悲劇的な自己矛盾」（『全集』第18巻、536ページ）を露呈したさい、トカチョーフを「類いまれなほど未熟な青臭い中学生、いってみればロシアの革命的青年のなかのカールヒエン・ミスニック（ドイツのユーモア作家D・カーリシュが創造した、知ったかぶりの弱虫の人間の形象）として特徴づけられる」（同、534ページ）と評したことが発端となって、トカチョーフが1874年『亡命者文献』の筆者フリードリヒ・エンゲルス氏あての公開書簡」という一書をものにしたのを機にその反論として書かれた第5論文「ロシアの社会状態」がそれである。

ここでは「農奴解放以来、ロシアの農民の状態が耐えがたい、長くはもたないものになったこと、この訳け合いからだけでもロシアに革命が迫っていることは明らかである。問題はただ、この革命の結果がどんなものでありうるか、どんなものになるだろうか、だけだ」（同、555ページ）と問題設定し、アルテリ（生産協同組合）と共同体的土地所有について関説する。

そこで、まずアルテリについてであるが、アルテリは「ロシアに広く普及している一種の組合（Assoziation）で『自由な協業（freire Kooperation）のもっとも単純な状態』（同上）である。それはロシア、スラヴだけのものではなく、イギリスにもドイツにもある『自然に成立した、したがってまだきわめて未発達な協同組合（Kooperative Gesellschaft）』（同、557ページ）である。

ではロシアのアルテリをどう評価したらよいか。エンゲルスはいう。

「ロシアでこの形態が優勢なことは、たしかに、ロシア人民のあいだに強い組合本能が存在することを証明しはするが、しかしロシア人がこの本能の助けを借りてアルテリからいきなり社会主義的な社会秩序に飛躍する能力をもっていることを証明するものではどうていない。それには、なによりもまずアルテリ自体が発展能力のあるものとなり、[.....] すくなくとも西ヨーロッパの協同組合の立場まで高まる必要がある。[.....]

現代の協同組合は、すくなくとも、それが自前で大工業を^{しまえ}経営して利益をあげることができることを証明した（ランカシャーの紡績業と織物業）。アルテリは、これまでのところ、そうする能力がないばかりでなく、もし発展を続けていかなければ、大工業にぶつかって必然的に没落しさえる」（同上）。

アルテリの西ヨーロッパの協同組合——「自前で大工業を経営して利益をあげることができる」現代の協同組合の立場への発展転化——これが課題だというのである。

それではロシアの共同体的土地所有に移ろう。エンゲルスはまず大ロシア（ロシア本土）に保存されている共同体的土地所有は「農業生産とそれに照応する農村の社会状態がここではまだまだきわめて未発達の段階にあることを証明する」（同、559ページ）もので、実際にも「ロシアの農民は自己の共同体のなかだけで生きて動き、残りの全世界が、彼にとって存在するのは、それが彼のこの共同体に介入してくる限りのことでしかない」（同上）。そこで、ロシア語

のミール (mir) が「農民共同体」を意味する一方、「世界」を意味するほど「個々の共同体が互いに完全に隔絶しあっている状態は——これはなるほど一様であるとはいえ、共同の利害の正反対の利害を全国にわたってつくりあげる——は東洋的専制主義 (orientalishen Despotismus) の自然発生的基礎であって、インドからロシアにいたるまで、この社会形態は、それが支配していたところでは、いつでもそうした専制政治を生み出し、いつでもこれを自己の補足物とした」(同上) のである。そおれゆえ「ロシア国家一般ばかりでなく、その特殊形態であるツァーリ専制でさえ [...] ロシアの社会状態の必然的・論理的産物」(同上) なのである。

しかもロシアの共同体的土地所有は、ロシアが「ブルジョア的な方向に発展」(同上) し、ていっており、インドでのように農民が共同で耕作し、生産物だけを分配するのではなく、「土地をときどき個々の家長に分配し直し、各人が自分の分与地を自分で耕作している」(同上) ので、共同体成員のあいだに裕福さの非常に大きな差があって富裕な農民(クラーク)が高利貸として農民大衆の膏血をしばっている。そのうえに共同体所有にもっとも激しい打撃をくわえたのは、これまた賦役の償却であった。貴族には、土地の最大・最良部分が割り当てられた。農民には、やっと生きていけるだけの土地、往々にして生きていくのに足りない土地が残された。そのうえ、森林は貴族のものだと裁定された。農民は、それ以前にはそこからただでもってきてよかった薪や木工用材や建築用材をいまでは買わなければならない。こうして農民は、いまや自分の家と不毛の土地以外には何ももたず、この土地を耕す金もなく、概してその土地も、一収穫期から次収穫期まで自分と自分の家族を養うのには足りない。こうした事情のもとでは、また税金と高利貸付の重圧のものとは、土地の共同体所有はもはや恩恵ではなくなり、一個の桎梏となる。農民はしばしば、渡り労働者として食っていくために家族づれ、または単身でそこから出奔し、その土地を故郷に捨てていく。

これでおわかりのように、ロシアの共同体所有 (Gemeinde-Eigentum) は、その盛りの時代をとくに過ぎてしまい、どうみても解体に向かって進んでいる」(同、560ページ)。

では共同体的土地所有は解体するのにまかせるほかはないのか。否、西ヨーロッパのプロレタリア革命が起こるならば「ロシアの農民がブルジョア的分割地所有という中間段階を通過せずともすむような仕方では、この社会形態をこのより高次の形態に移し入れる可能性」は、いまなお現実性をもつとする。

「とはいえ、事情がそこまで熟してくるまでこの社会形態が存続するなら、また農民がもはや個々別々にではなく共同して土地を耕作するような方向にこの社会形態が発展できることをそれ自らが示すなら、この社会形態をより高次の形態に移し入れる可能性があること、つまり、ロシアの農民がブルジョア的分割地所有という中間段階を通過せずともすむような仕方では、この社会形態をこのより高次の形態に移し入れる可能性があることは、否定できない。だが、そうしたことが起こりうるのは、共同体所有がまだすっかり解体してしまわない前に、西ヨーロ

ッパでプロレタリア革命が勝利のうちに遂行され、それがロシアの農民に、この移行のための前提諸条件、ことにこの移行に必然的に結びついている農民の農耕制度全体の変革を遂行するためにだけでも農民が必要とする物質的な諸条件をも提供する場合に限られる [.....]。ロシアの共同体所有を救い、それに新しい、真に生命力をもった形態に変わる機会を与えることのできるものが、いまなお何かあるとすれば、それは、西ヨーロッパのプロレタリア革命である」(同、560-561ページ)。

それではこのエンゲルスの所論はいかなる経緯のもとに書かれたのであろうか。和田氏は「これはマルクスの提供した材料によって書かれているのであり、したがって彼との討論に基づいて書かれたことは明らかであると考える」(前掲『革命ロシア』、64ページ)という新説を唱える。

そう考える理由として、和田氏はまず『資本論』ドイツ語版の本源的蓄積的の章の『フランス語版資本論』での書き替えを挙げる。

「マルクスは、ドイツ語版第1版、第2版では『農村生産者、農民からの土地収奪は全過程の基礎をなす。この収奪の歴史は、国が異なれば異なる色彩をおび、また、順序を異にし歴史的時代を異にする相異なる諸段階を通過する。それはイギリスでのみ古典的形態をとるのであって、だから吾々はイギリスを例にとるのである』とあったところを、フランス語版では、『資本家的制度の根本には、それゆえ、生産者と生産手段の根底的分離が存在する.....この発展全体の基礎をなすのは農耕者の収奪である。これが根底的に遂行されたのはさしあたりイギリスにおいてだけである。.....しかし、西ヨーロッパの他のすべての国々も、これと同一の運動を経過する』と修正したのであった。この含意は、イギリス的な土地収奪の道は西ヨーロッパの国々に限定される、すなわち、東ヨーロッパ、ロシアには別の道がありうることを言わんとするところにある。マルクスは脱稿直後の、1月11日、ラヴローフにドイツ語第2版とフランス語版の最初の6分冊を送ったが、そのさい、フランス語版における増補・訂正についてふれ『フランス語版に含まれている最も重要な変更はもちろん、まだ出ていない部分のなかに、詳しく言えば、蓄積に関する諸章のなかにあるわけです』と書いている。マルクスがはっきりと自覚的にこの修正を行ない、かつ当初よりこの修正点に深い意味をこめていたのは、明らかである。ここに、マルクスはチェルヌイシェフスキーの主張に触れて考えてきた結論を確実に述べたのである。エンゲルスへの協力はこの結論を前提にしている」(同、65ページ)。

つぎに「マルクスの提供した材料」であるが、アルテリ論に関して、和田氏は「ここでエンゲルスがアルテリについて述べるところは、マルクスが『アルテリ資料集』で読んだエフィメンコの主張である」(同、66ページ)。「エンゲルスはアルテリの発展と没落の二つの可能性の存在をみとめたのである。これはマルクスに負う結論であろう」(同上)という。

また共同体的土地所有論では「大口ロシアで存続しているのは、『農業生産とそれに照応する農村の社会状態』が『未発達段階』にあることを示している」と書く。これは、マルクスとも、

チェルヌイシェフスキーとも共通する認識である。ついでエンゲルスは、個々の共同体の完全な隔絶の状態は『東洋的専制政治の自然発生的基礎』であると主張する。これも一般的な認識であり、バクーニンも同じ認識を『国家制と無政府』の付録Aに述べている。[.....] 共同体の現状について買戻金の重圧を指摘し、『土地の共同体所有はもはや恩恵ではなくなり、一個の桎梏となる』として、出稼ぎに触れるのは、註記されているように、マルクスの提供するスカルヂンによる記述である。[.....] 共同体を『桎梏』と断定するのは、マルクスとしては、迷うところであろう。しかし、それが論旨の主軸でないことは明らかである」(同、66 67ページ)。

そして「ロシアの農民がブルジョア的分割地所有という中間段階を経過せずともすむような仕方では、この社会形態をこのより高次の形態に移し入れる可能性があることは、否定できない」という結論的主張については、『より高次の形態』、『中間段階』という用語法をふくめて、これが、チェルヌイシェフスキーの結論の承認であることは明らかであり、マルクスとの共同の結論である」(同、67ページ)とされる。

こうして和田氏はマルクス・エンゲルス共同創造説を打ち出されたのである。

そしてここにはまたマルクス、エンゲルスによる共同体的土地所有とアルテリ＝生産協同組合を通ずる社会主義への道も提示されている。

さて、次にエンゲルスがこのテーマと対面する機会となったのは、1869年のロシア語版初訳バクーニン訳が品切れになって久しいので、1881年3月13日の皇帝アレクサンドル2世暗殺事件後の1882年、ブレハーノフがおこなった『共産党宣言』ロシア語第2版に序文を付すことをブレハーノフが依頼してきたときである。執筆依頼は直接にはマルクス宛てであったが、妻イェンニーを亡くし最悪の精神的・肉体的状態にあったマルクスは執筆をエンゲルスに託したので、ドイツ語文の下書きはエンゲルスの手になるものである。そしてマルクスはこの下書きにわずかな書き入れを加えたのち自署して公表の運びになったのである。

ではその1882年の『共産党宣言』ロシア語版第2版序文はどういっているであろうか。

「序文」はまず『宣言』の最初の出現のときは、ロシアは「ヨーロッパ反動全体の最後の予備軍」(前掲『共産党宣言・共産主義の諸原理』、10ページ)であったが、現在、「ヨーロッパにおける革命的運動の前衛」(同、11ページ)になっているもつて「ロシアで土地の大半が農民の共同所有であるのを見出す」(同、12ページ)と述べてのち、こう設問する。

「そこで、つぎのことが問題となる——ロシアのオープンシチナ〔農民共同体〕は、たしかに原始的な集団的土地所有のすでにいちじるしく崩壊した形態ではあるが、いっそう高度の、共産主義的な土地所有の形態へ直接に移行することが可能であろうか？ それとも、反対に、それは西ヨーロッパの歴史的発展を自ら規定したのと同じ崩壊過程を新たに経なければならないのであろうか？

この問題にたいするこんにち可能な唯一の答えは、つぎの通りである。もしもロシア革命が

西ヨーロッパの労働者革命の合図となり、それゆえにこの両者がたがいに補い合うならば、現代のロシアの土地の共同所有は共産主義的發展の出発点となりうるであろう」(同上)。

それではこのロシア發展の二つの道の可能性に対する序文の解答をどうみるべきであろうか。和田氏はマルクスのザスリーチ宛ての手紙・草稿と序文との関係を問うて、以下の解釈を示している。

「ところで、このエンゲルスの文章をマルクスは承認して、自らの署名をも書き加えたのであるが、ここで述べられた見解とマルクスのザスリーチ宛ての手紙および草稿に述べられた見解とはどのような関係に立つのであろうか。

ロシアの共同体が『社会的再生の拠点』となりうる、『共産主義的發展の出発点』になりうるという点では、二つの見解は完全に合致している。そのための条件についても、両者のあげるのは、1875年に(「ロシアの社会状態」で引用者)エンゲルスのあげた条件、西欧におけるプロレタリア革命の『勝利』と勝利した革命による物質的援助という二条件とは異なり、ロシア革命の主体性を第一義的に重んじている。[.....]マルクスの認識も変り、そしてマルクスにみちびかれて、エンゲルスの認識も変ってきたとみるべきであろう。だが、その上で、条件として資本主義の技術的成果の利用可能性と欧米の資本主義的生産の危機を指摘するにとどめ、ロシア一國革命の一定の先行をもいう『手紙』草稿のマルクスと、ロシア革命の前衛性をみとめつつも、なおはっきりと西欧プロレタリア革命による補充の必要をいう『序文』のエンゲルスとでは、明らかにニュアンスが異なるといわざるをえない。[.....]資本主義生産の危機をいう立場と、西欧のプロレタリア革命の開始という立場の差も決して絶対的なものではない。だから、彼はエンゲルスの『序文』にそのまま自らの署名も加えたのであった」(『革命ロシア』、205-206ページ)。

1883年のマルクスの死後、「ヨーロッパの社会主義者の相談役、また指導者」(レーニン「フリードリヒ・エンゲルス」『レーニン全集』第2巻、11ページ)と仰がれたエンゲルスは1880年代に繰り上げられたロシア資本主義論争についてもダリエリソンとの交通を通して注視していく。この論争はダリエリソンの「改革後のわが国の社会経済概観」(『スローヴォ』、1880年。のち、1893年に増補のうえ、同名の著書になる)、ヴォロンツォフ(筆名、ヴェ・ヴェ)の『ロシアにおける資本主義の運命』(1882年)らのロシア資本主義没落論とプレハーノフ『われわれの意見の相違』(1885年)にみるロシア資本主義發展不可避論との対立から生まれたもので、レーニンの『ロシアにおける資本主義の發展』(1999年)はその最終的成果である。

この論争を踏まえて1875年の「ロシアの社会状態」を書いた20年後、「エンゲルスのロシア論の決定版であり、総決算の位置を占めるもの」(淡路憲治『マルクスの後進国像』、未来社、1971年、362ページ)とされているのが、エンゲルスの死の1年前の1894年に書き上げられた『『ロシアの社会状態』のあとがき』である。

エンゲルスはここで改めて1877年の「『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピスキ』(祖国雜記)

編集部あての手紙」でいわれている二つの道の可能性についての問題提起を再提出している。

「マルクスが、[.....] チェルヌイシェフスキーの意見を要約している言葉を借りれば、『ロシアは [.....] 自由主義 [的経済学] 者が希望しているように、まず農民共同体の破壊から始めて、そのあとで資本主義制度に移行すべきなのだろうか、それともその反対に、ロシアは、その独特な歴史的与件を発展させていくことによって、この制度の苦しみを味わわずに、この制度の果実全部をわがものにすることができるのであろうか?』」（『全集』第18巻、680ページ）。

この提起についてエンゲルスはいう。

「問題の提起そのものがすでに、解答を求めるべき方向を示している。ロシアの共同体は、数百年にわたって存続してきたが、そのなかからは、それ自身を共同所有のより高度の形態に発展させる推進力は全然生まれなかった。[.....] だから、ロシアの共同体が、それとは違った、もっとよい運命をもつであろうかという問題をおよそ提起できるとしても、それは、ロシアの共同体自体のせいではなくて、もっぱら次のような事情のせいなのである。すなわち、西ヨーロッパで商品生産一般だけでなく、その最高にして最後の形態である資本主義的生産までが、それ自身のつくりだした生産諸力と矛盾におちいり、この諸力をそれ以上管理していくことができないことを自ら証明し、こうした内的矛盾とそれに照応する階級衝突とのために滅亡するときまで、この共同体がヨーロッパの一国において比較的に生命力をもって保持されてきたという事情のせいである。このことからすでに明らかなのは、ロシアの共同体をこのように改造するかもしれない主動力は、この共同体自体からはけっして生じてくることはできず、もっぱら西ヨーロッパの工業プロレタリアートからのみ生じうるということである。西ヨーロッパのプロレタリアートのブルジョアジーに対する勝利、その勝利と結びついておこなわれる資本主義的生産の社会的に管理された生産による置き替えこそ、ロシアの共同体が [西ヨーロッパと] 同じ階段に高められるのに必要な前提条件である」（同、680 681ページ）。

そして、これに加えてエンゲルスはさらに西ヨーロッパのプロレタリアートのブルジョアジーに対する勝利による共同体の発展転化ということは、ロシアだけでなくおよそ氏族制度やその遺物を保存している先資本主義的段階にある国一般に当てはまるとし、後進国の非資本主義的發展の道をも提示している。

「次のようなことは、ありうるだけでなくたしかに起こることでもある。すなわち、西ヨーロッパの諸国民のあいだでプロレタリアートが勝利して、生産手段が共同所有に移されたあと、資本主義的生産にいまやとたどりついたばかりで、まだ氏族制度やその遺物を保存している国々にとって、共同所有のこの遺物とそれに照応する人民の慣習が、この国々の社会主義社会への発展過程をいちじるしく短縮し、こうしてわれわれが西ヨーロッパで切り抜けていかなければならない苦しみと闘争の大部分を免れさせてくれる強力な手段になるということが、それである。だが、それには、これまで資本主義的であった西ヨーロッパの先例と積極的な支援と

が不可欠の条件となる。資本主義経済がその生れ故郷とそれが栄えている国々で克服された場合にだけ、後進国がこの先例によって『どうやるべきか』、つまり近代的工業生産諸力を社会的所有としてどう全体の役に立てるかを認識する場合にだけ、これらの後進国は、この短縮された発展過程を開始することができる。だが、この場合には、それは確実に成功し得る。しかもこのことは、ロシアばかりでなく、先資本主義的段階にある国のすべてに当てはまる」(同、682-683ページ)。

だが、エンゲルスは先資本主義的段階にある国のうち、ロシアは自ら自国の革命を開始しうる「革命期」をもつことができるとしていう。

「だがロシアでは、それは、他に比べていちばん容易であろう。というのは、この国では、国内の住民の一部がすでに資本主義的発展の知的な成果を体得しており、そのためにこの国では革命期には、西ヨーロッパとだいたい同時に社会改造を成就できるようになるからである」(同、683ページ)。

そしてこのことこそ1882年の『共産党宣言』ロシア語第2版序文で言ったことであるとして、先に引用しておいて一文を掲げている。

「このことは、マルクスと私が、1882年1月21日に、プレハーノフの出した『共産党宣言』のロシア語訳の序文のなかですでに述べたところである」(同上)。

したがって「ロシア革命が西ヨーロッパのプロレタリア革命の合図」になるというロシア革命先行論はここでもなお棄却されていないというべきである。

しかし問題はプレハーノフの提起したロシア資本主義発展不可避論が正当であったことを示している1894年時点でも「ロシアの共同体的土地所有は共産主義的発展の出発点」になりうるかである。エンゲルスはいう。

「ところでしかし、忘れてはならないことは、ここで述べたロシアの共同所有のひどい崩壊が、それ以後、いちじるしく進んだことである。[.....] この解放とともに、ロシアには資本主義時代が始まった。だが、それとともに、土地の共同所有の急激な破壊の時代も始まった」(同上)。「こうして短時日のあいだにロシアでは資本主義的生産様式のいっさいの基礎が築かれた。そしてそれとともに、ロシアの農民共同体の根幹にもまた斧鉞ふえつが加えられた」(同、687ページ)。

それにもかかわらず、エンゲルスは内発的なロシア革命に期待して掉尾とうびを、以下のように締めくくっている。

「この共同体のうち、1882年にマルクスと私がまだ希望したように、必要な場合に、西ヨーロッパの急変と歩調を一つにして、共産主義的発展の出発点となりうるだけのものがまだ保存されているかどうか、これに答えようなどは、私はあえて思わない。だが、この共同体の遺物を少しでも保存させるつもりなら、そのための第一条件となるものは、ツァーリ専制主義の打倒、ロシアにおける革命であることだけは、確かである。この革命は、国民の大多数である

農民を、彼らの『ミール』[共同体]、つまり彼らの『ミール』を形成している彼らの村落での孤立状態から抜け出させ、彼らが外界、ならびにそれとともに自分自身、自分自身の状態、および現下の窮乏から救われる手段を知る大舞台に引き出すばかりでなく、それはまた西ヨーロッパの労働運動に新しい刺激と新しい、よりよい闘争条件を与えもし、それによって近代的工業プロレタリアートの勝利をも早めるであろう。この勝利なくしては、今日のロシアが、共同体からも、資本主義からも抜け出して社会主義的改造に到達することはできないのである」(同、689-690)。

そこでこの掉尾の一文をいかに解するかが問題となる。この点について和田氏はいう。

「この結びは、従来、これまで論じ来たったロシア資本主義発展論と矛盾する『空語』(竹内芳郎「われわれにとって『資本論』とは何か(下)『思想』1972年6月号、56ページ)、『一般論』(淡路憲治『マルクスの後進国像』、378-379ページ)とみなされてきた。しかし、ここでエンゲルスが述べるのは、ロシアにおいて資本主義が発展しても、共同体が残存しておれば、ロシア革命につづく西欧での変革の勝利、によって、その『共同体の遺物』がなお『共産主義的發展の出発点』となりうると主張しているのであって、本文中の主張との間に矛盾はない。[……]

すでに、資本主義をへずして、革命によって共同体をロシア社会再生の出発点としようと考えられた1881、82年の状況は去っていた。ロシアにおいて資本主義は成立していた。プレハーノフは、資本主義の一層の発展に救いをみており、共同体などは東洋的専制主義の基礎にすぎぬとみていた。ダニエリソンは、資本主義は危機に立ち到った。他方で、分解する一方だと思っていた共同体はなお生命力をもっている、これを基礎にして、ロシアの社会変革を、と呼びかけていた。エンゲルスは、両者の間で、資本主義は発展するだろう、しかし、共同体が残っていれば、それはなおロシア社会再生の出発点の一つになりうる、と主張したのである。

ロシア資本主義は雇役制的農業構造をその構造の一環として伴うという構造的特質をもつものであった。共同体も分解せずに、存続した。その現実のなかで、エンゲルスの最後のロシア論をおくとき、それが生命力をもちえていることをみることができる。エンゲルスは、『後書き』を書き終えてから、パンフレット全体のまえがき([小冊子『「フォルクスシュタート」からの国際問題(1871-1875年)』の前書き—引用者]を書き、次のように執筆の意図を説明している。『ロシアの農民共同体の将来に関する問題』がロシアの人々の心を奪っており、マルクスの『祖国雑記』編集部あての手紙がさまざまな解釈をうけている。自分は、この点について、しばしば意見を求められたが、知識が不十分なので、断ってきた。復刻のために、止むをえず、『今日のロシアの経済状態の比較的研究』から若干の結論をひき出した次第だ。『これらの結論がロシアの共同体に無条件に偉大な未来を約束するものにはなっていないとしても、それらは他方ではまた、西方における資本主義社会の倒壊の切迫がロシアにも、いまやロシアに不可避になっている資本主義を通過することを著しく短縮する可能性をあたえるであろうと

う見解を基礎づけようとしてつとめているものなのである。(『全集』第22巻, 417ページ)(前掲『革命ロシア』, 338-339ページ)。

それゆえ、一言でいえば、エンゲルスは、1990年代央のロシア資本主義の構造的確立段階にあっても、ロシア革命が西ヨーロッパ革命に対する合図になって両者が互いに補い合うなら共同体的土地所有の遺物の保存は資本主義時代を著しく短縮する可能性を与えるというのである。

[マルクス、エンゲルスのロシア革命論とブレハーノフ、レーニン]

それではこのようなマルクス、エンゲルスの共同体的土地所有とアルテリ=生産協同組合を通ずる社会主義への道という革命路線はブレハーノフ、レーニンにどのように受容されたのであろうか。

まず、〈ロシア・マルクス主義の父〉ブレハーノフからみてみよう。

ブレハーノフは1875-1876年の冬に、当時、バクーニン主義者であったアクセリロートと知り合い、自らも確信的なバクーニン主義者となってナロードニキ革命運動に入り、1876年12月のカザンスカヤ広場でのデモンストレーションに際してチェルヌイシェフスキーへの顕彰演説をおこない、一時、亡命するが、1877年に帰国、その12月には詩人ネクラソフの葬儀に際して、ドストエフスキーに伍して社会派詩人ネクラソフはプーシキンより偉大であるとの弔辞をささげている。そしてチェルヌイシェフスキーの共同体擁護論を継承して、1879年の「社会の経済的発展法則とロシアにおける社会主義の課題、その一」(『土地と自由』第3号)を書く。和田氏は、この論文の基本線を、以下のように整理する。「『わが国の自由主義的評論家』の主張によると『マルクスのロシア人の弟子の任務は、資本主義的生産一切がロシアにおける社会主義の発展のために必要なことだという意識で自らを慰めつつ、自国工業の発展を保護し、自国人民の数世紀来の伝統を改変し、その土地を剥奪することにある。』(『革命ロシア』, 111ページ)。

これに対して、すでに『資本論』第 部のロシア語版を読んでいたブレハーノフは、こう反論する。

「『ブレハーノフは、人類が『任意の真理を実現する』ことができると信じていた歴史の段階は去った、いまや社会主義者は社会主義の実現のために『先行する社会生活の結果たる社会変革の要素』に注目する、マルクスにあっては『社会主義はヨーロッパ社会の経済発展の過程からひとりで現われるものだ』と述べる。しかし、だからといって、西欧の道は西欧以外の国々にとって必然であるとはいえない。『カール・マルクス自身、われわれの知るかぎりでは、好んで人類を『一般的法則』というプロクルステスの寝台に置きたがる人びとには属していないのだ。』

ブレハーノフの立てる論理は、次の通りである。まず、『資本論』第一巻ロシア語版の序言から [.....] 引用する。「一社会が自らの発展の自然法則の足跡に入った (напало на след) ときには、.....その社会は、その発展の自然な局面を跳び越えることも、法令によってそれを

排除することもできない」[.....]。ここからプレハーノフは『つまり社会がこの法則の足跡にまだ入っていない (не нападало) 』うち、この法則によって惹起される経済的局面の変化はその社会にとって必ず起こるというものではない』と展開する。西ヨーロッパでは、共同体が分解し、共同体原理が個人主義によって置きかえられたとき、このことが起こった。ところが、ロシアではなお共同体が農民の大部分をとらえている。だから——プレハーノフはいう——われわれは『資本主義的生産がその進歩の途上においてなくてはならぬ停車場となるところの法則の道にわが祖国が入ったものとみなす (считать наше отечество, ступившим на пути того закона) 』ことはできない』。したがって、ロシアは『資本主義的生産を避けること』ができるのだ。それには共同体に加えられている『国家または隣の大地主からの経済的搾取』、『共同体の安寧とその一層の発展を妨げる敵対的影響』の排除が必要である。

プレハーノフは、共同体のうちには『それを破滅に運命づけるようないかなる矛盾も見出さない』と述べている。問題は、外的な条件にある。そのような外的諸条件の排除によって共同体に自由な発展を保障しよう。そうするなかで、『粗放栽培が集約的栽培に、原始的な鋤がその性格上共同体の全員または若干名の協同を必要とするような用具にとりかえられるとき』、『労働の集団化』に進みうるのだ』(同、111 112ページ)。

このプレハーノフの所論は、資本主義がいまだ確立しない本源的蓄積期には二つの道の可能性があるという理解である。しかも共同体把握において、外的要因によって崩壊することはあっても内的要因によっては崩壊しないという共同体無矛盾論にたっていることが注意される。

和田氏はこのプレハーノフの認識は「マルクスが『祖国雑記』編集部あての手紙のなかで述べた限りの認識」(同、113ページ)と背馳するものではないとみる。

ついでプレハーノフは1879年に上梓された、コヴァレフスキーの『共同体的土地所有——その分解、過程、結果』第1部への反論を1880年、『土地共同体とそのありうべき将来』(『ロシアの富』1880年1月号、2月号)においておこなう。ここでも和田氏の紹介と評価をみても、以下のようなものである。

「プレハーノフは、スペイン人が到来する以前に中央アメリカの大部分で不動産所有の封建化過程がはじまっていたという記述に注目し、インドについても『ここでもキリスト教徒やイスラム教徒の征服者の土地政策は「原始的共産主義」崩壊の『自生的』過程を仕上げたにすぎない』ととらえている。したがって、プレハーノフは、コヴァレフスキーの研究は歴史を『完全な集団主義』から『完全な個人主義』への発展ととらえるものだ」とみて、『コヴァレフスキーの研究を基礎にわれわれが到達しうる結論は共同体には不利である』と述べるのである。これは(.....)マルクスとは正反対の理解である。

プレハーノフは、なんとかコヴァレフスキーに反論しようとして[.....]『自生的原因』論に注目した。貴族身分や手工業・商業身分の共同体に対する闘争は、共同体にとって『第三者的な、共同体に敵対的な影響』とみなされるべきだというのがプレハーノフの主張である。

『彼、コヴァレフスキーは外部の共同体破壊者を、それ自身のなかにいる内部の「自生的な」ものといったのだ』。ここから、プレハーノフは次の主張を導く。『われわれは共同体の破壊を不可避的な歴史現象だとみなすことができない。否定的な影響の一定の結合のもとでは、この破壊は、実際に不可避的である。まさにそのような結合がわれわれの知るほとんどすべての文明国での共同体の破壊を惹起した。しかし、このことから、共同体が逆に成長し発展するような別の条件の結合がありえないとはまだいうことはできない』。彼は、その『別の条件の結合』として、次の三つの条件をあげる。(1)共同体が『なお土地所有の支配的形態をなしていること、(2)農民大衆と国のインテリゲンツィヤが共同体に対して『意識的・積極的態度』をとること、(3)『土地の集約的栽培』、『共同体の畑の共同利用を必要とする労働用具と方式の採用』に移ること。(2)の表現は、合法誌の論文としての『イソップの言葉』である。結論として、プレハーノフはいう。

『畑の共同利用へ適時に移行するか、それとも生まれつつある資本主義と闘争して破壊されるか——これが、われわれの意見では、現代の農村土地共同体一般、とくにロシアのそれにとって唯一の二者択一である』。

主張自体は、1879年論文のくり返しであるが、彼の危機意識は深まっている。コヴァレフスキー理解は逆向きでありながら、プレハーノフの主張する共同体発展の条件は、マルクスのそれと近いであろう(同、147-148ページ)。

だが、コヴァレフスキーのこの著書は人為的原因によって共同体は崩壊することはないという共同体無矛盾論にたつプレハーノフにとっては自生的原因による分解過程を証示されただけに衝撃的であり、自らの共同体認識の変更を迫られることになる。「プレハーノフは、1890年に書いた回想的文章のなかで、1879年のハルトウーリンとの会話に関連して、明らかにコヴァレフスキーの書物をさして、『これは、私個人に巨大な貢献をしてくれた、すこぶる重要な書物である。というのは、私は、なお、その結論に反対して論争したとはいえ、この書物は、私のナロードニキの見解をはじめ、かつきわめてはげしく動揺させたからである』と書いている(同、150ページ)。

さて、プレハーノフは1880年1月、「土地総割替派」団の決議により官憲の追及を逃れるため、ザスリーチ、ディナラとジュネーヴに亡命、ついでパリに移るが、この時期、ドイツ語の習得に力を入れ、マルクス、エンゲルスの諸著作を読破するなか、バクーニン主義からマルクス主義へと移行する。そしてこのプレハーノフのマルクス主義への移行は、田中真晴『ロシア経済思想史の研究』の表現を借りれば「バクーニンの教説というプリズムを外し、それを叩き割ることによって、マルクス理論それ自体に参入することに他ならなかった」(同、44ページ)といわれるべきものだったのである²⁾。

2) 田中氏の労作に対する書評については、『研究』の「再版への序」に掲記されている。これらのうち、水田洋氏、和田春樹氏、田中陽児、長尾久氏らのそれには若干のリプライがある。

では獲得されたマルクス理論とはどういうものだったのであろうか。それは『共産党宣言』のマルクス理論であって、成熟期・晩年のマルクス理論ではなかった。しかもそこにおいては『宣言』が歴史哲学的・教条主義的に受容されたので、ひとたびロシアが「資本主義の学校に入った」ならば二つの道の可能性は排除されるとされるにいたったのである。

そうであるがゆえに、プレハーノフが1881年半初めて『共産党宣言』を読み、その翻訳を発刊したことは自らのマルクス主義確立にとって画期をなすものといえる。事実、プレハーノフは1909年、以下のように回想している。

『個人的に自分自身についていえば、『共産党宣言』を読んだことは私の生涯における一時代を画することであったといえることができる。……マルクスの理論は、アリアドニーナの糸のように、バクーニンの影響下にわれわれの思想がもがいていた矛盾の迷路からわれわれを導き

このうち田中陽児の書評（『西洋史学』第77号、1968年4月）には書評の枠を越える興味ある私見があるので紹介しておこう。

「マルクス、エンゲルスとプレハーノフとの思想的位相のズレについていえば、『西欧プロレタリア革命の主導下にロシアが資本主義を回避する可能性があるという前者と『ロシアの経済制度の特殊性に対するわれわれ社会主義者の合理的な態度は、西欧の社会発展の正しい理解によってのみ可能である』というプレハーノフ（ともに『共産党宣言』露訳版序文、1882年）とでは、忠実なる弟子はつねに師以上に師であろうとするが、師そのものは、たえずその一步を歩むが故に師であるのだ、という感慨を禁じ得ない。[……]

ロシアの、ではなくインド共同体については、それこそが無知と専制の根源である、と指弾するだけに終り、インドの共同体の内部で生活している人間の側に立った変革の思想など、考えようともしなかったマルクスが、ザスーリチあて草稿にみられるようなロシア共同体論を展開するに至った背後には、50年代と80年代の歴史的現実の発展と、マルクス自身の認識の深まりがあるわけで、この認識の深まりこそ、ロシアの革命家＝ナロードニキの思想的インパクトの勝利にほかならず、彼らの思想こそが、マルクスをして、『資本論』の適用範囲の自己限定をなさしめた大きな力であったことを銘記したい。

逆にいえばプレハーノフのロシア社会論は50年代のマルクス、エンゲルスの東方社会認識の延長線上にあって、80年代初頭のマルクスのロシア認識の線上にはなかった。そのためにプレハーノフは、一見、ロシア社会の伝統的構造の把握に秀でていくかにみえながら、それが一向に、ロシア人プレハーノフの独自のロシア資本主義論の形成に結果せず、したがって戦略的にも、労農同盟やソビエトの意味づけに魅かれることもなく、プロレタリアートの必須の友軍として、ひたすら戦闘的ブルジョアジーの到来が待たれることになる。」（同、71-72ページ）。

「たえずその一步を歩むが故に師」であるマルクス、エンゲルス。マルクス、エンゲルスをも対自的に発展史的にとらえるべきことを語って余蘊がない。

なお、「再版の序」を記した以降に出た書評というより論説に小島定「プレハーノフ研究の問題点——田中真晴氏のプレハーノフ論の批判的検討を中心に——」（『名古屋大学法政論集』第72号、1977年）がある。レーニンが1908年、『1905-1907年の第一次ロシア革命における社会民主党の農業綱領』が提起した「アメリカ型」と「ロシア型」というブルジョア的な農業進化の二つの型にあって、「アメリカ型」の発展のうちに田中氏が「資本主義はあっても市民社会はなかった」（前掲『研究』378ページ）ロシア資本主義における市民社会形成への展望があったというのが主旨であるが——その是非は別として——必見である。

出してくれた。この理論のおかげで、革命的宣伝が農民よりも労働者において比較にならぬほど好意的に受け入れられるわけがまったく了解されたのである。共同体を破壊するので、バクーニ主義者を動揺させずにはいなかったロシア資本主義の発展それ自身が、いまや、われわれにとって革命運動の成功の新たな保障の意義をもった。なぜなら、それはプロレタリアートの量的成長とその階級的自覚の発展を意味したからである。」（『革命ロシア』、200ページ）。

それでは自らが依頼したマルクス、エンゲルスの「ロシア語版第二版への序文」をプレハーノフはどう受け取ったであろうか。

この点に関して田中氏は前掲書において、マルクス・エンゲルスの「序文」と訳者「序文」とはくいちがいがあるとして、以下のように述べて「邦語文献としてははじめて、マルクス・エンゲルスとロシア・マルクス主義のロシア論との非連続を主張」（田中「著者への手紙」、和田春樹『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』、『現代の眼』1975年5月号、175ページ）されている。

「かれは訳者序文において、『共産党宣言』がロシアの社会主義者たちの二つの方向における誤り、すなわち『政治的活動に対する否定的態度』（かれ自身が指導者であった『黒土地再分割』派の偏向）と『将来の党の利益の忘却』（『人民の意志』党の政治闘争主義的一面性）を正す道を教えている、と述べている。また、『わが国では、ロシアの社会主義者の任務は西欧の同志の任務と本質的にちがっているという確信が、いまでもなおずい分根づよくひろがっていることはたしかである。しかし、すべての国の社会主義者にとって終局目的は同一であるべきことはさておいても、ロシアの経済制度の特殊性に対するわれわれ社会主義者の合理的な態度は、西欧の社会発展の正しい理解によつてのみ可能である』という。プレハーノフはこのときすでに、未展開ながらもロシア資本主義発展論をいだいて、プロレタリア社会主義党の形成を考えている。ところが、マルクス、エンゲルスが書いてくれた序文のほうは[……]ナロードニキ的な二つの道の可能性の思想を支持するものであって、プレハーノフの序文と調和しないところがある。プレハーノフは、ロシアについてのマルクス、エンゲルスの判断が間違っている、とは明言していない。しかし事実においては、そしてプレハーノフ自身そのことを自覚しなかったはずはないのだが、あえてマルクス、エンゲルスのロシアについての判断を押しきって、二つの道の可能性の思想を否定することによって、マルクス主義をロシアの革命理論として導入することができたのである。このことは、マルクス主義の各国への導入と定着の歴史を考えるうえで注目されるべきひとつの事実である」（前掲『研究』、46ページ）。

他方、和田氏は新たな事実指摘を『革命ロシア』で提出している。それは、以下のことである。

「テキストを受けとったプレハーノフの方は、この序文に明らかに不満であった。述べられている主張は、ザスーリチあての手紙と基本的に異なっていなかったからである。プレハーノフは結びの一句を次のように訳した。『もしもロシア革命が西欧での労働者革命の合図となり、

両者がたがいに補いあうならば、現在のロシアの土地所有は共産主義的発展の出発点たること
ができる (Если русская революция послужит сигналом рабочей революции на Западе, так
что обе пополняют друг друга, то современное русское землевладение может явиться исходным
пунктом коммунистического развития)。

原文の『土地共有制』が、ここでは、たんに『土地所有』と訳されて(『革命ロシア』, 207
ページ) いたのである。

そしてマルクス、エンゲルスの「序文」とプレハーノフの「序文」= 「はしがき」を比較され
て、和田氏も上記の田中説= マルクス・エンゲルスとロシア・マルクス主義のロシア論との
非連続説を肯定されて「このプレハーノフの『はしがき』とマルクス、エンゲルスの『序文』
とは際立った対照をなしていた。『ロシア・マルクス主義』の困難かつ不幸な出発はまさにこ
の隔絶のうちに象徴されている」(同, 208ページ) とされたのである。

その後、1883年にプレハーノフはアクセリロート、ザスリーチ、ディナラと「労働解放」団
を創設、その事実上の創立宣言である「現代社会主義叢書の刊行について」において「ロシア
における将来の労働者社会主義党のためのエレメントの創造」を目的として唱い、プレハーノ
フは1883年に『社会主義と政治闘争』, 1885年に『われわれの意見の相違』を刊行する。

この間、エンゲルスがマルクスの遺稿からみつけた『オテーチェストヴェンヌイエ・ザピスキ
[祖国雑記] 編集部への手紙』のコピーを1884年3月6日付で「必要とされるように使って
かまいません」という添え状をつけてザスリーチに送っているが、結局、「労働解放」団によ
ってはこのマルクスの手紙は印刷されず、1886年「人民の意志」派によって『ヴェストニク
・ナロードノイ・ヴォーリ』(『人民の意志通信』第5号, 12月15日), 最終号』に掲載される
ことになる。

これについて和田氏は、次のように推測している。

「共同体を生かす好機を逃すなというマルクスの遺言を他ならぬ『労働解放』団の手で公表
させようとするところに、このグループに対するエンゲルスの批判, ないし苦い忠告があらわ
れている。[.....] プレハーノフやザスリーチにとって、マルクス遺稿の内容は明らかに彼ら
の立場に不利だと思われたのであろう。このとき、プレハーノフとザスリーチの間で、1881年
のマルクスの手紙のことも思い出されたのではないか。あの手紙のことも口外すまい、と話し
合ったとしても、不思議ではない」(同, 238-239ページ)。

さて、プレハーノフがマルクス主義に完全に移行したことをはじめて公に表明した『社会主
義と政治闘争』は、「無政府主義的ナロードニキ主義は政治の否定を正当化してきた」が、こ
れに反して『人民の意志』派は民主主義的な政治的改革のうちに、もっとも信頼できる社会改
革の手段をみた」点で人民の意志派の優位を承認するが、それが革命的理論によって位置づけ
られていないと判断し、改めて自らの革命論を展開する。しかしそこでは「ロシアの社会的発
展過程は農民と土地の古くからの諸形態を破壊しながら、新しい社会構成を形づくっている」

(内村有三訳, 国民文庫, 106ページ) という現状認識にたち, すでにナロードニキ主義 = 「人民の意志」 党の共同体を通じての社会主義への道という連続二段階革命論は放棄されていたので, 来るべき革命がブルジョア革命であるとすれば, ブルジョアジーの支配の時期をへて社会主義革命が可能であるという見通しにおいて非連続二段階革命論というべきものになったといえる。

しかし『社会主義と政治闘争』が「人民の意志」派に受け入れなかったのをみて, プレハーノフはその基本思想をさらに全面的に展開したのが, 大著『われわれの意志の相違』である。この著書は, 田中氏にあって「先駆的ロシア資本主義分析」(前掲『研究』, 68ページ) と呼ばれ, プレハーノフの主著というべき位置を占めるといえるが, ここではテーマとの関連上, 和田氏のまとめによって「第3章 資本主義と共同体的土地所有」についてのみみてみたい。

「現実の共同体がなげかわしい状態にあるという認識については, 1880年のプレハーノフもいまのプレハーノフも, 『ナロードニキ』も, 『マルクス主義者』も, 一致していた。問題は, 共同体の可能な未来にある。80年のプレハーノフは, その破壊も, 成長・発展も『条件の結合』次第であるとみていた(マルクスも同じである)のに対して, いまのプレハーノフは『過重な租税と土地不足という重圧』が取りのぞかれれば, 『割替期間の長期化』, 『個人的不動産所有への……欲求に対する共同体の順応』がすすむと考える。『割替期間の長期化は, 共同体成員の間の不平等の結果であるが, もっぱら不平等の強化と農村共同体の最終的破壊をまねく』。プレハーノフは, 改良された農法の導入と買戻し操作の進行を協同体解体を促進する要因としてあげている。結論として, 彼は, 『資本主義と共同体的土地所有』の関係について, 次のようにいう。『……わが国の社会生活の全ダイナミックスが資本主義に向かっている。資本主義に逆らっているのは, 農民の一定部分の多少とも疑わしい利害, …あの惰性の力だけである』。『ロシア資本主義の主流はさしあたりいまだ小さい』。しかし, 『それを食い止めることはもはやできないし, まして, それを乾上らすことはできない。できるのは, ……その流れを調節することだけである』。資本主義発展の『流れ』に逆らうな。その流れに沿って未来をみよ, これがプレハーノフの主張だった」(『革命ロシア』, 243-244ページ)。

したがって, プレハーノフは「重税と土地不足という重圧」がなかったとしても, 「割替期間の長期化, すなわち事実上の分割地的土地所有への移行」(田中, 前掲, 106ページ) がいつそう促進され, 不可避的に農村共同体は最終的に破砕されるとみているわけである。

さてプレハーノフは『われわれの意見の相違』についてのエンゲルスのコメントを聞くべく85年2月14日, 自著をエンゲルスに送り, 同日, ザスリーチがエンゲルスに宛てて, 以下の要請を入れた手紙を書く。

「われわれはこの本についてのあなたの御意見をととも知りたいのです。その根本テーマは相変わらず自らの祖国の発展のために自立的な道を見出さんとするロシアの人びとの努力というあの神聖な問題です。この本はわれわれの小グループに反対する嵐を無条件で呼びおこすで

しょう。もっとも愛され、もっとも広まった教説、右派にあってはスラヴ主義的で、革命派にあってはバクーニン主義的なもの、『ナロードニキ主義』を攻撃しているのですから」(同、246 247ページ)。

それではこの要請にエンゲルスはどう答えたであろうか。それに答えたのが同年4月23日付のエンゲルスのザスリーチへの手紙である。

手紙はまずザスリーチの手紙への返答が遅延したことの弁解から始まる。

「あなたはプレハーノフの著書『われわれの意見の相違』について私の意見をお求めになりました。そのことのためには、これを読み終えておく必要があるでしょう。ところが、「私が秘書に口述筆記させているマルクスの原稿には、一日中かかりきっています。夕方になると、いろいろな人がやってきますが、結局は追い出すこともできません。校正刷りを読まなければなりませんし、たくさんの通信連絡をしなければなりませんし、また最後には拙著『家族・私有財産・国家の起源』の諸国語訳(イタリア語、デンマーク語等)があって、その校閲を頼まれており、その訂正は往々なくもがなでも、たやすいことでもありません。そうです、これらすべての横槍にじゃまされて、『意見の相違』は60ページ以上に達していません」(『全集』第36巻、272 273ページ)。

つまりまだ全巻を読了していない時点で書かれているのである。しかしエンゲルスはいう。

「それにしても、本書をすこし読んだだけでも、それは、思うに、取り扱われている(あなたの党派と『人民の意志』派とのあいだの——抹消。引用者)意見の相違を、多かれ少なかれ明らかにするに十分です。

まっさきに繰りかえして申し上げますが、ロシア青年のあいだに、マルクスの偉大な経済理論と歴史理論とを率直にずばりと受け入れ、先輩たちのあらゆる無政府主義的な、少しばかりスラヴ主義的な伝統ときっぱり手を切った、一つの党があるということを知って、じつに誇らしく思います。またマルクス自身も、もう少し長生きしていたら、やはり誇らしく思ったことでしょう。このことは一つの前進であって、これはロシアの革命的発展にとってたいへんな重要性をもつでしょう」(同、273ページ)。

この誇らしく思うという「マルクスの偉大な経済理論と歴史理論とを率直にずばり受け入れ、先輩たちのあらゆる無政府主義的な、少しばかりスラヴ主義的な伝統ときっぱり手を切った、一つの党」とは行文上、明らかに「労働解放」団のことを指しており、理論的見地としてはエンゲルスが「労働解放」団を支持していることは明らかである。

しかし当該の時点での革命的戦術はどうでなければならぬかは別であって、エンゲルスはマルクスの歴史理論のロシアへの適用に関して、以下のようにいう。

「マルクスの歴史理論は、私にとっては、筋の通った首尾一貫した革命的な全戦術の基礎条件です。この戦術をあみだすために、その理論を、問題となる国の経済的および政治的狀態に適用しさえすればよいのです。

しかし、そのことのためには、そういう状態をわきまえる必要がありますが、私はどうかと言うと、特定の時期にそこで要求される戦術の細目の是非判断の適格性を僭称するには、ロシアの当面の情勢について知らなすぎます。そのうえ、ロシアの革命党の内輪の深い過去の出来事、ことに、近年のそれが、私にはほとんどまったく未知です。『人民の意志』党派中の私の友人たちは、それについて一度も話してはくれませんでした。しかも、一つの見解をつくり上げるためには、そのことが不可欠の要素なのです。

つまり「労働解放」団か、人民の意志派のどちらの戦術が妥当かはにわかには判断できないとする。

だが、エンゲルスは「私がロシアの情勢について知っていること」にもとづいていえばという限定をして、以下のように自説を述べる。

「私がロシアの情勢について知っていること、または知っているつもりでいることは、ロシアでは1789年に近づいているという見解に私を向かわせませぬ。革命は一定の時期に爆発せざるをえませぬ。それはいつ、なんどき爆発するかもしれませぬ。こういう状態のもとでは、この国は敷設された地雷のようなものです。問題は導火線を使うことだけです。ことに3月13日以後は。これは、ひと握りの人たちにとって革命遂行が可能な、例外的な場合の一つです。言いかえれば、不安定を通りこした均衡状態（プレハーノフの隠喩を用いれば）にある体制全体をちょっとした衝撃によって崩壊させ、それ自身ではとるに足らない一行為によって、事後には制御しようもない爆発力をとき放つのです。そうです。もしブランキ主義——ちいさな陰謀行為によって社会全体をひっくり返そうという空想が、なんらかの存在理由をもったとすれば、それはきっとペテルブルクにおいてです。[.....]

わたしとしては、大事なのはロシアで弾みがつけられてほしいということ、革命が勃発してほしいということです。合図を出すのがあの分派であるか、この分派であるか、あの旗のもとであるか、この旗のもとであるかは、どうでもよいことです」（同、373-374ページ）

ではこの行文をどう理解するか。和田氏は、こういう。

「エンゲルスは、ここで断定的に、結論的にいった。『私の意見では、もっとも重要なことは、ロシアで革命を爆発させる衝撃が与えられることです。合図を与えるのがどの派か、これがどの旗印のもとでおこなわれるか、私にはさして重要ではありません』。この結論はザスリーチ支持の要請に対する明確なる拒否であった」（前掲、『革命ロシア』、250-251ページ）。

だが、エンゲルスは「合図を出すのがあの分派かこの分派かはどうでもよい」といっているであるから、この部分を引き合いに出して、「ザスリーチの支持の要請に対する明確な拒否」というのはやや行過ぎである。むしろここでは「ひと握りの人たちにとって革命遂行が可能な、例外的な場合」——「ブランキ主義が何らかの存在理由をもち」うる例外的な情勢への対処を問題にしているのであるから、革命的戦術の点では、「ひと握りの人たちによる革命遂行」というブランキ主義的戦術をとっている「人民の意志」派に肩入れしたうえで、「労働解放」団を

焚き付けているとみるべきであろう。

したがってエンゲルスはこの手紙では、理論的見地からは「労働解放」団を支持するものの、革命的戦術という面では「人民の意志」派に期待を寄せていたといつてよいであろう。

こう解すべきなのは、和田氏自身が挙げている1885年6月30日付のカウツキーからベルンシユタイン宛ての手紙が示すところでもある。

『エンゲルスはいまプレハーノフの最新のパンフレットを読んでいる。彼はそれが大変興味深いもので、理論的には大体において正しく、いくつかのまったくあっぱれな議論を含んでいるとみている。エンゲルスはたしかに非常な賞讃の辞を口にしている。しかし、そのパンフレットが理論的にはどれほど彼の気に入ったとしても、その戦術的議論については、彼は次のようにみている。私は、誤っているといたくはないが、時機に適したものではないと。今日、ロシアで問題になっているのは、綱領ではなく革命だとエンゲルスはいう。[.....] 彼らの理論的明晰さは彼らの実行力ほど意義をもたない。今日、ロシアでは綱領の差異の別なくすべての実行力のある分子を行動に集結しなければならない。だから、プレハーノフは、現在、ロシアで何事かをなしうる唯一の人びと、人民の意志を攻撃するという誤りをおかしたのだ。たとえ理論的には彼らに対して正しくともである。ロシアで現在問題なのは、ツァーリズムの転覆であり、この目的をめざすすべての分子の結集である。そして、エンゲルスは、たとえその綱領が不完全であったとしても、そのことに対応して行動する人々の側につねに身をおくだろう』(同、251ページ)。

エンゲルスは「人民の意志」派のブランキ主義的戦術への期待は以降も続く。和田氏は記す。

「1887年3月初め、皇帝暗殺の6年目の3月13日(1日)、アレクサンドル三世の暗殺をめざした青年たち、『人民の意志』党テロリスト分派のアレクサンドル・ウリヤーノフらが逮捕された。それは、『人民の意志』党の歴史の幕が下りたあとのエピローグにすぎなかった。ウリヤーノフがのちのレーニンの兄であることを言いそえる必要はなからう。だが、この事件が発表されると、エンゲルスは熱狂した。3月21日、彼は、ラウラ・ラファルグに書いた。

『サンクト・ペテルブルクのダイナマイト爆弾は決定的にその目的をはずさなかったように思われます。ロシア政府がロイターを通じて (!!) 全ヨーロッパに広めさせた哀れな声明をみてごらん下さい。ツァーリは革命の前に膝まづいています。親露派の『デイリー・ニューズ』すら、このみじめな文書と比較しうるのはアレクサンダル・バツェンベルクのツァーリあての電報のみだと述べています。この事態は、実際に、ロシアにおける終わりの初めであるように見えます。そしてそれは、ヨーロッパにおける終わりの初めでもあるでしょう』(『全集』第36巻、557ページ)(同、267ページ)。

では、プレハーノフに戻ろう。プレハーノフとの関係で最後に述べておかなければならないのは、プレハーノフによるエンゲルスの「ロシアの社会状態」と「その後書き」の取り扱いである。1894年夏、エンゲルスの1875年論文と「後書き」がザスリーチ訳で『フリードリッヒ・

『エンゲルスのロシア論』と題してパンフレットとして刊行されるが、プレハーノフは、それに「刊行者の言葉」を寄せている。これを和田氏は、以下のように紹介されているので取り上げておこう。

「プレハーノフは、そのなかで、エンゲルスの論文が二つの偏見をなくすと期待していると書いた。

第一は、ロシアの共同体がその内的本性により社会主義に移行するというスラヴ主義以来の偏見で、エンゲルスは、西欧で主人となった社会主義的プロレタリアートの影響なくして移行はありえぬと指摘しているという。この点に関連して、プレハーノフは『マルクスの「『オテーチェストヴェンヌイエ・ザピスキ（祖国雑記）編集部への手紙』によって、人びとは、マルクスの共同体観をバクーニン、トカチョーフ流のそれと同じものだとしてきた。なかには、『マルクスがミハイロフスキーに手紙を書いたという限りでマルクスに同意するというマルクス主義者』すら現われたのだが、この混乱は正されようと述べている。

第二は、ロシア資本主義の矛盾の解決を『ロシアの公衆』に期待する一種の『国家社会主義的計画を唱えるニコライ・—— オーンの著書によって、支えられている偏見』であり、『わが国の経済発展の特殊性からしてわが国には労働者階級の政治的自主活動の余地がない』とする考えである。プレハーノフは、エンゲルスの主張はこれを否定するものであるとして、『あとがき』の結びの параグラフをそっくり引用している。彼は、かつての自分の考えに近い、残存共同体が共産主義的發展の出発点になりうるとの思想には関心を示さず、この結びから汲みとるべきものは、空想的計画にではなく『専制との闘争』に全力をつくせという主張だとしている。

結論的に、プレハーノフは『資本主義の發展はロシアそのものにもプロレタリアートを創出した』として、インテリゲンツィヤがこれを無視することの誤りを強調している」（同、350ページ）。

明らかに、プレハーノフはエンゲルスの「後書き」の主旨を伝えていない。

それでは「『オテーチェストヴェンヌイエ・ザピスキ（祖国雑記）編集部への手紙』」の解釈のほうはどうか。和田氏は、「マルクスの「『祖国雑記』編集部宛の手紙」の解釈について、プレハーノフが、ここで述べたことは、エンゲルスの本文ともくいちがっているといわねばならない」（同上）といわれて、当時支持されていた『祖国雑記』編集部への手紙についての典型的解釈を示している。

「この手紙の解釈は、当時の『マルクス主義者』にとって強い関心の的であって、すでに、モスクワの『マルクス主義者』マンチェリシタムは、1892年7月にミハイロフスキーに出した抗議文のなかで、次のように反論していた。

『マルクスは、結論に大変慎重な学者として、ロシアの資本主義論争については、彼が分析した資料に基づけば、社会主義制度はヨーロッパでは資本主義的生産の發展の不可避的結果で

あると表明することが必要だとみたのである。しかし、この資料は、何らかの別の条件のもとでも社会主義制度へ到達しうるか否かという問題を解決するための材料を十分彼に与えなかった。この故に、彼は、ロシアについては、この問題を未解決なままに残し、若干の資料によって判断すれば、ロシアは資本主義的生産の道を急速に前進しており、したがって資本主義的生産の法則に従うことになるかと予想する大なる蓋然性があるとのみ限定するにとどめた。マルクスの手紙を正しく理解すれば、彼のロシア人の研究者がなすべきことは、ロシアの生活の条件の分析に向かい、この条件が資本主義的段階をへずに社会主義的制度へ直接的に移行するなんらかの可能性を呈しているかという問題に答えを出すことだと思う。

そしてマンチェリタムは、この抗議文のなかで、現在では答はまったく否定的であると主張したのである。明らかにマルクスの真意を歪めることにある、この『マルクス判断停止』論、『具体的分析のすすめ』論は、当時の『マルクス主義者』のもっとも一般的解釈となった」（同、350-351ページ）。

なお、プレハーノフは1895年に出版され、レーニンによって「ロシアの一世代のマルクス主義者を教育した」と高く評価されている『史的一元論』においても、『祖国雑記』編集部への手紙にふれている。和田氏は、これをマンチェリタムと同様の理解だとして、『史的一元論』の「結論」部を、以下のように評する。

「プレハーノフもまた『祖国雑記』編集部へのマルクスの手紙』問題を取り上げている。彼は、『資本主義的生産はすべての国とすべての民族にとって不可避的である』との『完全な歴史哲学』が『資本論』の問題の章にあるとミハイロフスキーがみたのは誤りだと主張して、社会の発展は『つねにその内部の社会諸勢力の相互関係のいかんにかかっている』ので、この事情こそ研究しなければならないという。この場合、彼があげる反論は、ローマ、スパルタ、インカにも資本主義が不可避だとはいえないではないか、というもので、マルクスが適用範囲を西ヨーロッパに限定したことなどは消し飛んでいる。彼は、マルクスが、この手紙のなかで、ロシアの経済的現実を学び、『条件つき』の結論』に達しているとする。それは、『もしもロシアが農奴解放以後にたどってきた道を歩き続けるならば……ロシアは完全な資本主義国となるであろう』というものに他ならない。『ロシアのマルクスの弟子』は、さらに研究した結果として、『そうだ、歩きつづけるであろう！ 1861年以來たどってきた資本主義的發展の道をロシアが速やかに捨てるだろうと期待させる材料はない』との条件つきでない結論を出している。プレハーノフも、『マルクスの手紙』に『具体的研究のすすめ』をみ、結論の『条件つき』性格を強調しているのである」（同、356ページ）。

なお、付言しておく、この『史的一元論』の「結論」部で、プレハーノフは「すでにいまでもいえることは、近代産業によってつくりだされる労働の社会化が、生産手段の国有化をもたらずに違いないということ」（改訳『史的一元論』川内唯彦訳、岩波文庫、下、53ページ）をマルクス・エンゲルスの見解だとしているが、これはレーニンの国家社会主義論の先蹤^{せんしゅう}とみ

なしうる。

それではレーニンは『オテーチェストヴァンヌイエ・ザピスキ (祖国雑記)』編集部への手紙をどうみていたのであるのか。これについて和田氏は、以下のような手厳しい批判をおこなっている。

「1894年6月にペテルブルクで出版された無著名の非合法パンフレット『「人民の友」とは何か。そして彼らは社会民主主義といかにして闘うか (『ロシアの富』誌のマルクス主義批判論文への回答) は、周知のごとく、『ロシアのマルクス主義者とは、ロシアの現実には資本主義社会であり、この社会からの活路はただ一つブルジョアジーに対するプロレタリアートの階級闘争である、という現実観から出発している社会主義者である』とする観点より、ミハイロフスキーのマルクス主義者批判、ユージャコフ、クリヴェンコの経済的分析を批判したものであるが、このパンフレットも、『手紙』問題については、ほぼ同様の論理を展開した。筆者、のちのレーニンは、次のように述べている。

「だから、マルクスの言っているのは、ミハイロフスキー氏はマルクスを、ロシアは特殊の発展をするという考えの反対者と見る権利はなかった、なぜなら、マルクスは、この考えを支持する者 (チェルヌイシェフスキー——引用者) に対しても敬意を払っているからである、ということである。——ところが、クリヴェンコ氏は、マルクスがあたかもこの特殊の発展を『承認』したかのように理解している。これはまったくの曲説である。右に引用したマルクスの言明は、マルクスが本質に触れた答をすることを避けていることを、まったく明らかに示している。『そして、マルクスは、この評言を曲解の機因とならせないために、同じこの『手紙』のなかで、彼の理論がロシアに対してどのように適用されうるかという問題に、はっきり答えている。この答は、マルクスが本質に触れた答を避けていること、問題の唯一の解決者となりうるロシアの諸資料の検討を避けていることを、とくに一目瞭然と示している。』(『レーニン全集』第1巻、大月書店、278-279ページ)。

この解釈は、『マルクス判断停止』論である。レーニンは『最良の機会』喪失という手紙の核心部分には触れず、後半から引用して、次のようにいう。

「問題がまさしく、ロシアは資本主義国民になろうとする傾向にあるかどうか、ロシアの農民の零落……は存在するかどうか、という点にあったことは、もはやまったく明らかである、と思われる。そして、マルクスは、『もし』ロシアがそうする傾向にあるなら、そためには農民の大きな部分をプロレタリアに転化させなければならない、と言っている。言いかえれば、マルクスの理論は、ある国々の経済制度の進化を研究し説明するところにある。そして、彼の理論をロシアに『適用』することは、唯物論的方法と理論的経済学との完成された手法とを利用して、ロシアの生産関係とその進化とを研究することのみありうる。」(同、279ページ)。

手紙の主張は、『ロシアの生産関係とその進化』の具体的『研究』のすすめである、というのがレーニンの第二点である。これによって、マルクスの手紙は、まったく無内容化、無害化

されるのであった」(同, 351-352ページ)。

すなわち、レーニンも当時の「マルクス主義者」らの通説にしたがって『祖国雑記』編集部への手紙を「マルクス判断停止論」、「具体的研究のすすめ論」のディメンジョンでとらえていたのである。

ブレハーノフにあっても、レーニンにあっても、マルクス、エンゲルスの共同体的土地所有とアルテリ(生産協同組合を通ずる社会主義への道)は採られることがなかったのである。

そこで、こうみてくると、初発のロシア・マルクス主義の創設期にあつてすでにマルクス、エンゲルスとブレハーノフ、レーニンはロシア共同体論、ロシア革命論、資本主義から社会主義への移行過程論において非連続、断続していたのであつて、マルクスとレーニンを同一視することはできないといわざるをえない。それゆえブレハーノフによって創始されたロシア・マルクス主義はマルクス主義のロシアの変種であつて、本来のマルクス主義とは相隔たるものである。

そしてのちに論証するように、われわれはこの初発での疎隔は、またソ連型社会主義自壊の第一の原因でもあつたとみなすものである。

ソ連という経済社会構成体とは何だったのか——アソシエーション社会主義 VS 国家社会主義
それでは第2の論点であるマルクス、エンゲルスとレーニンとの社会主義像の異同についてはどうであろうか。

これについての解答を与えるためには、1917年の10月革命後、内戦、ネップ(新経済政策)、レーニン死後のトロツキー対ジノヴィエフ・カメネフ、スターリンとの党内闘争、トロツキー、ジノヴィエフ・カメネフ対スターリン、ブハーリンの党内闘争、その間の第一次5カ年計画、農業集団化、スターリンによるブハーリンの肅清とそれにつづく大テロル、大祖国戦争の勝利、スターリンの死後のフルシチョフによる個人崇拜批判、ブレジネフによるフルシチョフ解任、ブレジネフ時代のネオ・スターリン主義、ゴルバチョフのペレストロイカの失敗によるソ連邦解体、エリツィンによる資本主義の復活といった一連の画期をもって終焉したソ連型経済社会システムとは何であつたかが解明されていなければならない。

1930年代後半以降、ここでソ連型経済システムが何であるか、何であつたかに関しては、三つの見解がある。

その一つは、“正統マルクス主義”を呼称したスターリンとスターリン主義者の見解である。周知のようにスターリンは1936年11月25日の第8回ソヴェート大会におけるソ連憲法案に関するスターリンの報告「憲法について」において「社会主義の勝利」を語るとともにソ連型社会主義について自らの定式化を与えている。

すなわち、報告では第一次5カ年計画、第二次5カ年計画の遂行によって「社会主義的生産様式がいまや、わが工業の支配的体制であるということ」(スターリン『憲法について』(石川

湧沢, 彰考書院・解放文庫, 1946年, 6ページ), 農業の領域で「小農業経営の大海の代わりにいまや, コルホーズ=集団農場, およびソホーズ=国営農場の普及した制度」(同, 7ページ)をもっていること、「商品の全流通がいまや国家, 協同組合, および集団農場の集中にある」(同上)ことの三点を挙げて、「こうして国民経済のあらゆる領域における社会主義体制の全面的勝利が, いまや, すでに獲得されている」(同, 8ページ)と宣言し, マルクスが共産主義の第一段階とした社会主義が実現したとして, 以下のようにソ連を規定する。「わがソヴェート国家は, すでに本質的に社会主義を実現するにいたった。それは社会主義的秩序を創造した。すなわち言葉を換えていえば, マルクス主義者が共産主義の第一段階, または下位段階と呼ぶところのものを実現したのである。だから共産主義の第一段階たる社会主義が, わが国においてすでに全体として実現されたのである (拍手, 続く)」(同, 18ページ)。

すなわちスターリンによれば, マルクスが『ゴータ綱領批判』で述べた「資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会の第一段階」(後藤洋訳『ゴータ綱領/エルフルト綱領批判』, 新日本出版社, 30ページ)にソ連は到達したとしたのである。したがってスターリンによってここで述べられた所説は, ソ連型社会主義 = 「正統マルクス主義社会主義」説というべきものである。

そしてこのソ連型社会主義 = 「正統マルクス主義社会主義」説は戦後, スターリン死後の1954年にまとめ上げられたソ同盟科学院経済学研究所の共同著作『経済学教科書』によって下記のように謳い上げられ権威づけられたのである。

「社会主義は, 生産手段の社会的所有——それには, 国家的 (全人民の) 所有と協同組合的・コルホーズ的所有という二つの形態がある——にもとづく制度である。そして, この制度のもとでは, 人間が人間を搾取することはなく, 国民経済は, 勤労者の増大していく欲望を生産の絶えまない高揚によってもっとも完全に充たすために, 計画性をもって発展し, そして, 労働に応じた分配の原則がおこなわれるのである。

ソ同盟における社会主義の勝利は, 人類の歴史のうえでもっとも深刻な革命的変革であった」(マルクス・レーニン主義普及協会訳, 合同出版, 第三分冊, 1955年, 633ページ)。

このソ連型社会主義 = 「正統マルクス主義社会主義」説は, 1956年のフルシチョフの「秘密報告」によるスターリン批判以前は自明の理とされてきたが, それにとどまらず, スターリン批判以降においても批判的姿勢で貫かれているとはいえ, ソヴィエト・ロシア史研究の第一人者, E・H・カーにおいても共有されている。すなわちカーは生前, 最後のロシア革命史論である『ロシア革命 レーニンからスターリンへ 1917 1929年』(初版, 1979年. 塩川伸明訳, 岩波現代文庫, 2000年)において, こう述べる。「ソヴェト計画経済は, 社会主義の『物質的・経済的片われ』であり, 革命の主要な産物なのであった。[.....] この達成に『社会主義』の名称を与えるのを拒むのはばかげている」(同, 269 270ページ)。

この見方はカーの盟友でわが国におけるスターリン政治体制研究の第一人者である溪内謙氏

においても共有されている。すなわち浜内は『現代社会主義を考える』（岩波新書、1988年）において1987年のロシア革命70年に際して、「10月革命」をもって「社会主義は『体制の時代』に入った」（同、1ページ）と記し、そこに「現代社会主義体制の歴史的起点」（同、169ページ）を求めている。

他方、ソ連型社会主義 = 「正統マルクス主義社会主義」説に対し、真っ向からアンチテーゼを対置したのはスターリンとの一国社会主義論争に敗れ、国外追放されたトロツキーである。トロツキーはスターリンが「憲法について」の報告においてソ連における社会主義の勝利を宣言した同じ1936年に『裏切られた革命』（原題『ソ連とは何か、そしてソ連はどこへ行きつつあるか』。藤井一行訳、岩波文庫）を公刊したが、そこで「官僚制的に墮落せる労働者国家」説（E・マンデル『ソヴィエト国家の本質』『ニュー・レフト・レビュー』1978年3-4月号）というべき所説をたてている。すなわちトロツキーはソヴィエト体制にあっては「国営企業」を「徹底して社会主義的な企業」（同、303ページ）であり、それゆえ国家的所有を「社会化された所有」（同、63ページ）と呼び、コールホーズ経営は「個人経営と国家経営との中間に位置」（同、303-304ページ）するとみなしたうえで、スターリン一派の支配的カーストという機構が「党を従属させ、かつその機構を国家機構と癒着させ」（同、348ページ）、官僚機構をとほうもなく肥大化させることによってレーニンの『国家と革命』における「死滅しつつある国家」テーゼを裏切った体制と把握したのである。

そしてソ連が社会主義の第一段階 = 下位段階を実現したというスターリンの確言に対しては「労働生産性というあらゆる問題中の問題」（同、92ページ）の見地からすると「達成される労働生産性とはかかわりなしに、所有の形態のみを問題にするだけでは片付かない」（同、69ページ）のであって、「共産主義の低次段階というものは、経済発展の面で[.....] もっとも先進的な資本主義よりも高いところにあるような社会」（同上）でなければならないとすれば、「技術、生活用品、文化の面で、今日、なお資本主義国よりずっと貧しいソ連には低次段階の規定は当てはまらない」（同、70ページ）。それゆえ今日のソヴェト体制は、社会主義体制ではなしに準備的な体制、もしくは資本主義から社会主義への過渡的な体制と呼ぶほうが正しい」（同上）とする。

みられるように、生産手段の国家的所有を社会的所有であるとする点ではスターリンもトロツキーも同一の理解にたっている。ただしスターリンは現在、ただ今、国家的所有をただちに社会的所有 = 社会主義的所有と称えるのに対し、トロツキーは国家的所有は「社会的な特権や差別が、したがって国家の必要性も消滅していくその度合いに応じてのみ『全人民的』なものになっていく。言い換えれば国家的所有は国家的であることをやめるにつれて社会主義的なものに転化していく。そしてその反対でもある」（同、297-298ページ）とみなし、「経済の性格はまったく国家権力の性格にかかっている」（同、313ページ）という。したがってトロツキーにとっては土台 = 下部構造の国家的所有を全人民的所有 = 社会主義的所有に転換するためには、

「組織化された武装ソヴェト貴族と非武装の勤労大衆との対立」(同, 347ページ)のうえにたつ「新しいタイプのポナパルティズムの一変種にほかならない」(同上)スターリン体制を打倒する上部構造における「第二の補足的な革命」(同, 360ページ)が必要であると結論づける。

しかし土台 = 下部構造の「国家的所有 = 社会的所有」説をトロツキーがスターリンと共有していることは、トロツキーより「左」のサイドにあって「反帝・反スタ」(反帝国主義・反スターリン主義)を貫こうとする広義のトロツキストによっては容認できるものではないので、トニー・クリフの『ロシア = 官僚制的国家資本主義論』(初版, 1955年. 対馬忠行・姫岡玲治訳, 論争社, 1961年)をはじめとして「ソ連 = 国家資本主義」説が登場する。そしてこの潮流はソ連が「走資派」 = 「新しいブルジョアジー」に支配されていると攻撃する中ソ論争・文化大革命期の毛沢東派の「社会帝国主義」論の影響を受けたシャルル・ベトレームの『ソ連の階級闘争』第1巻(初版, 1974年. 高橋武智・天羽均・杉村昌昭訳, 第三書館, 1987年), 第2巻(初版, 1977年)における「国家ブルジョアジー」説に受け継がれるが, 1989年のソ連型社会主義の崩壊期——東欧社会主義の崩壊に続き, 1991年のソ連社会主義の崩壊を見た一時期, トロツキズムの立場にたっているとはいえない研究者からも一定の支持をえて大谷禎之介・大西広・山口正之編『ソ連の『社会主義』とは何だったのか』(大月書店, 1996年)などが公刊される。

では、なぜ、ソ連が国家社会主義といえるのか。その主唱者、大谷禎之介氏は「『現存社会主義：は社会主義か』(法政大学『経済志林』第58巻第3・4合併号, 1991年)において、この点を明らかにしようとしている。すなわち、社会主義の第一メルクマールは「商品生産とは正反対の生産形態であるということ、つまり商品も貨幣もない社会だということ」(同, 4ページ)であるからして市場経済を伴う社会主義なるものはありえない。とすればソヴェトの生産様式の本質は国家資本主義であるとして、然る所以を以下のように説明される。

「国家資本は、国家が所有する単一の資本が唯一の経済単位として存在する、という仕方ではなくて、工業においてはもろもろの国営企業という形態で、農業においては多数のソホーズおよびコルホーズの形態で存在し、それらがそれぞれ経済単位として機能していた。行政的・指令的計画経済のもとで機能不全の状態におかれてはいたが、それらのあいだには商品の流通が、市場があった。労働者・農民は、生産手段の国有化にもかかわらず、生産手段を共有する連合した個人になることはついになく、一貫して、国営企業やコルホーズなどに自己の労働力を販売する賃労働者であった。労働力は商品であり、労働者はその売り手であった。彼らは、たとえば移動の自由も買い手を選択する自由もないという、商品の売り手としては著しく不自由な状態にあったが、彼らの不自由は、彼らが生産手段を共有し、共同で利用することからくる不自由でもなければ、前資本主義的關係による不自由でもなくて、国家(したがって党)の行政的・兵營的な、戦時経済的な統制による不自由であった」(同, 11ページ)。

すなわちソ連の労働者は生産手段の国有化にもかかわらず国家資本のもとに雇用される賃勞

働者であるということに国家資本主義規定の根拠を見出されているのである。

だが、「ソ連 = 国家資本主義」説にはトロツキーおよび E・カーの批判がある。トロツキーは前掲『裏切られた革命』でいう。「史上はじめての生産手段の国家集中は資本家による国家的トラスト化という方法ではなく、プロレタリアートによる社会革命という方法で実現された。「ムッソリーニのイタリア、ヒトラー・ドイツの——引用者」資本主義的エタティスムをソヴェト制度と同一視しようという試みはばかげている。前者は反動的であり、後者は進歩的である」(前掲書, 310ページ)。

この批判は「国有的所有 = 社会的所有」説から当然出てくる批判であるが、カーの批判はもっと具体的である。前掲『ロシア革命』はいう。「ソヴェト計画経済のもとで達成されたものを『国家資本主義』と呼ぶ見解は支持されえないように思われる。企業家もいなければ失業も自由主義もない資本主義、労働者によって生み出された剰余価値を収奪する階級もなく、利潤は純粹に補助的な役割を演じている資本主義、価格と賃金が需要供給の法則には従っていない資本主義などは、もはやいかなる意味でも資本主義と呼びうるものではない」(同, 269ページ)。

したがって問題はソ連の生産手段に「国家資本」という資本規定を与えることができるかどうかという前提問題にかかわっている³⁾。

付言すると、マルクス、エンゲルスは国家資本というカテゴリーを使用しており、これが「ソ連 = 国家資本主義論」の論拠にされているが、マルクス、エンゲルスには国家資本主義というカテゴリーは見られない。

さて、ソ連が「正統マルクス主義社会主義」でもなければ、「官僚制的に墮落せる労働者国家」でもなく「国家資本主義」でもないとするれば、何と規定すべきであろうか。旧著『社会主義』(初版, 1949年。野々村一雄訳, 岩波書店)では「ソ連 = 正統マルクス主義社会主義」説をとっていたポール・M・スウィージーは、ベトレームと同じく毛沢東派の社会主義への過渡期と社会主義段階を混同した社会主義下の階級闘争永続説を受け入れて、1980年『革命後の社会』(旧版, 伊藤誠訳, TBSブリタニカ, 1980年。新版『革命後の社会』伊藤誠訳『革命後の社会』1990年, 所収)でソ連型社会 = 「社会主義でも資本主義でもなく資本主義から社会主義への過渡的体制でもない社会構成体」説を打ち出す。そこでは、こういわれている。

「私は、革命後の社会が、マルクス主義者たちによって伝統的に理解されてきた社会構成体としての資本主義でも社会主義でもなく、またトロツキー主義者たちが主張しているように、官僚主義的変形によって一時的に偽装されているそれら二つの社会の間の過渡的社會でもない

3) ソ連崩壊後、発刊されたもののうち、ソ連 = 国家資本主義説擁護のために有力な論調を張っている著作にチャトパティカイ『ソ連国家資本主義論』(原題『マルクスの資本概念とソヴェットの経験』, 初版1994年。大谷慎之介/叶秋男/谷江幸雄/前畑憲子訳, 大月書店, 1999年)がある。

この著作についての検討は「スターリンの農業集団化とソ連型兵営共産主義の確立」の最初の部分で国家資本主義と国家社会主義との共通点、相違点を取り扱うさいにおこないたい。

と主張してきた。私の考えでは、それは資本主義および社会主義双方と基本的に十分異なった、それ自身新しい社会構成体として考慮され研究されてよい社会である」(同、223ページ)。

そして「それ自身新しい社会構成体」を「ソヴェートのパワーエリート」が「本質的に自己再生的な支配階級として形成された」(同、234ページ)「新しい種類の階級社会」(序章、18ページ)と規定する。

すなわち、スウィージはソ連は「新しい階級社会」であるがゆえに「社会主義ではない」としつつ、「私は革命後の社会の発展を資本主義の『運動法則』によって分析しようと保証する人を誰も知らない」(「マルクス主義理論の危機」前掲書所収、222ページ)ところから「資本主義でもない」としてこの二つの否定語による非社会主義・非資本主義説をたててソ連社会を規定したのである。

そしてこのソ連型階級社会の根本的矛盾について、以下のようにいう。

「実際のところ階級社会のすべての矛盾のうち、もっとも根本的なものは、富の真の生産者が、何をいかにして生産し、それをどんな用途に当てるかということについて、ほとんどまったく管理権を剥奪されていることであるが、その根本的矛盾がなお存続し、ある意味では深刻化しているのである。[.....] 必要とされていたのは、社会主義者たちが長く議論してきているように、労働作業と労働者に対して根本的に異なる態度をとり、経済と社会のあらゆるレベルにおける意志決定に労働者を参加させるということであり、自由な人間の共同責任として労働過程を人間的なものとする任務を自ら引き受けるよう労働者たちに奨励することであった」(同、288-289ページ)。

しかし、このソヴィエト体制のもとで「富の真の生産者からの管理権の剥奪」というこの「根本的矛盾」を解決することが不可能であるなら、その派生的矛盾として生ずるのは、失業の脅威をともなう「資本主義的能率刺激制度」という「ダモクレスの剣」(同、239ページ)がないがゆえに、資本主義のもとでの労働者のそれより低い労働意欲(モラル)である。

「資本主義的能率刺激制度(解雇だけでなく、格下げおよび所得や地位の喪失、さらにそれら多くのことの複合的恐怖)によって駆り立てられることのない非政治化された労働者階級は、長い虐待と抑圧の関係のほか、ともにするもののない支配階級によって立てられている諸目的——資本家に追いつくということや軍事力を最大にすること、あるいは他の何であれ——のために、夢中で働くことにはあまり興味のない労働者階級となっているように思われる」(同、240ページ)。

そこでスウィージはブレジネフ政権下のソ連経済は「今や行き止まり」に「達して」「出口がはっきり見えているとは言えない停滞期に入っているように思われる」と結ぶ。

なお、ソ連は社会主義でもなく資本主義でもなく資本主義から社会主義への過渡期でもない社会というスウィージの所説と根底において同様の所説とみなせるものに聴濤弘氏の「独特の位階制社会」説がある。聴濤氏は『ソ連とはどういう社会だったのか』(新日本出版社、1997

年)においてソ連を「生産手段の私的所有が廃絶されたにもかかわらず、社会を支配する全般的貧困がうみだして『独特の位階制社会』ができた」(84ページ)という。もっとも聴濤氏はスウィージーと異なり、ソ連=階級社会論は採らない。「私は階級というものは、生産関係のなかに位置づけられた科学的社会主義の明確な規定をもった概念であるわけで、それに照らさずに特権をもった者をなんとなく階級といいあらわしてしまうのには疑問をもちます。やはりソ連社会というのは官僚——特権官僚層が支配する社会だったと思います。階級と仮にいつても生産手段の所有者ではないわけです」(同、93 94ページ)としているが、妥当である。

だが、スウィージー、および聴濤氏のこの所見には疑問がある。

というのは社会主義でも資本主義でもない体制を独自の社会構成体と規定できるのかという点である。

そこで想起されるのはマルクス、エンゲルスにあっては社会主義という術語はけっして一義的な定義によって語られているのではなく、『共産党宣言』の「社会主義的および共産主義的文献」においても「封建的社会主義」、「小ブルジョア社会主義」、「ブルジョア的社會主義」、「批判的・空想的な社会主義」など(前掲、87 105ページ)、種々様々な存在形態をもつとされていることである。

この問題は1985年のゴルバチョフのペレストロイカ開始後の4年目の1988年に発刊されたペレストロイカ推進派の知識人たちの総集編といわれるアフナーシェフ編『これ以外の道はない——ペレストロイカ、民主主義、社会主義』(邦訳『ペレストロイカ思想』、和田春樹他訳、群像社、1989年)に所収されたA・ブデンコの「国家・行政的社會主義の革命的ペレストロイカ」においてすでに提起されているところで、ブデンコは「科学的社會主義以外に別の社會主義は存在するか」(同、354ページ)と設問し、「イエス」と答えたあと、次のようにいう。「誰よりもまずマルクス、エンゲルスの權威を借りたい。彼らは『共産党宣言』のなかで、とくに封建的、ブルジョア的、プチブル的社會主義という言葉のカッコなしで堂々と使用している。もちろん、そういった各種の社會主義が科学的社會主義とは縁もゆかりもないことは十分承知のうえである」(同、365ページ)。

それではソ連型社會主義は科学的社會主義以外の社會主義であったとしても、いかに規定されるべきか。和田春樹氏は「本書を通じて、多くの論者が1930年代に成立してブレジネフ時代に停滞した社会システムを「国家社會主義」と呼んでいる(同、421ページ)という。

現に編者のアフナーシェフは、「日本の読者へ」の序文において「スターリン=ブレジネフ的國家社會主義」()と呼んでおり、V・キセリョーフは同書所収の「ソ連には社會主義モデルはいくつあったか」という論文の「社會主義のマルクス・モデル」という節で、まずマルクス・モデルを、以下のように整序する。

「マルクス、エンゲルスによれば、社會主義は、生産手段の社会的所有を土台とした、意識的に規制された、すなわち計画化された、商品の存在しない、自主管理的な社会である。プロ

レタリアート独裁は過渡期にのみ必要であり、暴力は、打倒されてもなお抵抗するブルジョワジーに対してだけ行使される。勤労大衆はパリ・コミュン型の自治的協同社会に組織され、共同利害を導く国家は安価なものとなり、大衆のコントロールのもとにおかれよう。常備軍と警察は廃止される」(同, 222ページ)。

ついでエンゲルスが『反デューリング論』で展開した、社会主義の本質をめぐるデューリングとの論争を、社会主義の経験に照らして再検討する。

すなわちデューリングの社会主義にあっては貨幣と国家が存在するのであるが、エンゲルスはこの二つが存在することに反対する。

「社会主義のもとで貨幣を保存してはならないのはなぜか。エンゲルスによれば、貨幣が保存されればコミュンを『分断』、『解体』してしまう。コミュンにおいて、価値法則を労働力にまで及ぼすことなく保存しようとするのは馬鹿げている。『商品形態がすべてを包摂する性格をもつ』のは必然的だからである。

デューリングはまた、社会主義のもとで常備軍、警察、憲兵、裁判所が存在するだろうとも述べている。エンゲルスはこれに反対し、デューリングを模範のプロシヤ人と比べたが、彼らは、内相フォン・ロヒョウの言葉を借りれば『胸の中に自分の憲兵を抱いている』のであった」(同, 224ページ)。

それゆえキセリョーフは問う。「いずれが歴史的にみて正しかったのだろうか。商品と国家の存在しない社会主義を考えたエンゲルスか、双方とも保存する未来社会を考えた折衷主義者デューリングか」(同上)。

そしてソ連型社会主義はデューリング型社会主義であり、それは国家社会主義であると規定する。

「もしエンゲルスが正しければ、社会主義は存在せず、いぜんとして空想に、せいぜい予測にとどまったままということになる。この予測が正しく、なおかつ、現実の社会主義がほとんどデューリングの構想どおりに建設されているなら、マルクス、エンゲルスのいう共産主義段階と資本主義との間に、もう一つの社会が発生したと考えることができる。

それを国家社会主義と呼ぶことができる」(同上)。

したがってソ連型社会主義は社会主義のカテゴリーに入るが、「マルクス・モデル」ではない国家社会主義であったということになる。

ソ連型社会主義 = 国家社会主義説はソ連以外でも受け入れられ、デービット・レーンがソ連型社会主義の興亡を『国家社会主義の興亡』(The Rise and Fall of State Socialism. 1996. 溝端佐登史・林裕明・小西豊訳, 明石書店, 2007年)と捉えて、一書を著わしている。

わが国でも和田春樹氏は、この所説を導入して『歴史としての社会主義』(岩波新書, 1992年)において1929年に発動された「上からの革命」の3つの柱——(1)階級闘争としての文化革命 文化のポリシェヴィキ化, (2)農業の全面的集団化, クラーク(富農)の絶滅, (3)強行的工

業化 = 第一次五カ年計画を通じて「計画経済化と経済の一元化、党・国家・社会の一元化が実現された。ここにおいて人類がこれまでに知ることのない完全に新しいシステム、国家社会主義体制が完成された」(100ページ)とする。そしてこの「国家社会主義」説にそって世界歴史大系『ロシア史 3』(山川出版, 1997年)が編纂されることになる。

それでは「国家社会主義」説は妥当だといえるであろうか。筆者には二つの理由からこの所説は正当だと考えられる。

その一つは、マルクス・エンゲルスが科学的社会主義以外の社会主義として国家社会主義 (Staats-sozialismus) 概念を使用していることである。まずマルクスについてみてみると、1882年1月15日付のエンゲルスへの手紙においてビスマルクが1882年1月9日の帝国議会において選挙における政府の敗北を認めた「ビスマルクの告白」を「ドイツの労働者が彼の国家社会主義 (Staats-sozialismus) をいくらか「軽蔑した」という告白」を「一大勝利」(『全集』第35巻, 31-32ページ)とみなしている箇所、1882年12月8日付のエンゲルスへの手紙での「『ゾツィアル・デモクラート』はヴァーグナー = ビスマルク的な国家社会主義 (Staats-sozialismus) の性格描写のためにはプロナンセンの国営鉱山などにおける労働者の取り扱いについての資料 (詳細にわたる) を手に入れなければならないだろう」(同, 102ページ)という箇所がそれである。

また、エンゲルスは1884年1月18日付のベーベルあての手紙でインドネシア (ジャヴァ) に国家社会主義が現存していることを報じている。

「もし、君が国家社会主義 (Staats-sozialismus) の見本を研究しようと思うなら、ジャヴァがそれだ。ここでは、オランダ政府が古い共産主義的村落共同体 (kommunistischen Dorfgemeinde) を基礎にして全生産をまことにみごとに社会主義的に組織し、全生産物の販売をまことにたくみにその掌中に収めているので、役人や軍隊の給料のための約一億マルクのほかに、なお、オランダの不運な国家債権者への利払い用として、年々、約7000万マルクの純収益が上がるほどである。これにくらべれば、ビスマルクは本当の子供にすぎない」(『全集』第36巻, 80ページ)⁴⁾。

4) ビスマルク = ヴァグナー流の国家社会主義への批判をエンゲルスはベーベルだけでなくカウツキーにも勧め、1884年2月16日付のカウツキーへの手紙ではマニー『ジャヴァ 植民地経営法』(1861年)がその典拠であることを明らかにしている。

「いま、はびこっている国家社会主義 (Staats-sozialismus) を、ジャヴァで実地に満開の花を咲かせている見本によって暴露する労を誰かがとってくれと、いいのですが。材料はすべて法廷弁護士 J. W. B. マニー著『ジャヴァ 植民地経営法』(ロンドン, 1861年, 全2巻)のなかに見いだされます。それによれば、オランダ人がどのように古い共同体共産主義 (Gemeinde-kommunismus) を基礎として国家の手で生産を組織したか、そして彼らの観念からすればまったく快適な生活を人びとに確保してやったかが、わかります。その結果は、人民が原始的な愚昧の段階に引き止められ、そして年々、7000万マルクが (いままでおそらくもっと多くの額が) オランダの国庫に流れ込んでいるということです。この事例はたいへん興味深く、そこから教訓を引き出すことは容易です。ついでは

したがって、ここにはビスマルク型国家社会主義とジャヴァ型国家社会主義の二類型があることになる。

ちなみにビスマルクの国家社会主義とは『反デューリング論』の傍注によれば、「ビスマルクの国有化への熱中」（『全集』第20巻、287ページ）のことを指し、エンゲルスは「国有化ならどんなものでも、ビスマルクのそれでさえ、文句なく社会主義的だと宣言する、ある種の虚偽の社会主義（falscher Sozialismus）」（同上）の出現を語っている。

がら、これは、今日、原始共産主義（Urkommunismus）がジャヴァでも、インドやロシアでも、搾取と専制のためのすてきな、きわめて広範な基礎を提供していること（近代共産主義の要素がそれを揺さぶり起こさないあいだは、また現代社会の唯中にあるには、それはスイスの原三州の独立のマルク共同体に劣らぬ、はなはだしい（除去されるべき、あるいはまた、ほとんど背進的）時代錯誤（Anachronismus）という実態を示しているということを実証するものです」（『全集』第36巻、99ページ。この手紙はドイツ語版からのもの）。

ちなみに、和田氏は『革命ロシア』において、この「カウツキー宛ての手紙」について、以下のような評言を加えている。

「エンゲルスがマニーの著書を知ったのは、マルクスの文書のなかで彼が発見したばかりの人類学関係のノートにある抜き書きからであった。同じノートにモルガンの『古代社会』やフィアやメン、ソーム、オスピタリエの著書からの抜き書きがとられていた。（……）先のマニーの紹介の部分は、エンゲルスが、いまやロシアの共同体も『収奪と専制』の『基礎』にすぎず、『アナクロニズム』であると主張するにいたったかのような印象を与える。カウツキーは、回想のなかで、そのようなコンテキストのもとに、この部分を引用している。しかし、そのようには考えられない。エンゲルスはこのところ、またマルクスの遺稿のなかから、マルクスが『祖国雑記』編集部にあてた手紙をも発見していた。彼は、共同体を救う革命を呼びかけるマルクスのメッセージを是非とも公表したいと考えた」（同、237ページ）。

この手紙が「いまやロシアの共同体も『収奪と専制』の『基礎』にすぎず、『アナクロニズム』であると主張するにいたったかのような印象を与える」理由の一つには「はなはだしい（除去されるべきというか、それともほぼ退歩しつつあるというのかのいずれかである）アナクロニズム」（和田氏訳）という一文のカッコでくられた「除去されるべきかというのか、それとも」の選択文で「それとも」の次が「ほぼ退歩しつつある」と記述されていることが預かっている。

しかし村田陽一氏の「訳者注」によると、ドイツ語版での「ほとんど背進的」（和田氏の訳では「ほぼ退歩しつつある」）は間違いで、本来の原文にしたがって、正しくは「さらに発展させられるべき」に訂正すべきことを明らかにされている。

「「ほとんど背進的」[fast zurückentwickelnder] は、1955年、ヴィーン刊の『ブリードリヒ・エンゲルスとカール・カウツキーとの往復書簡』（ペーネディクト・カウツキー編）では「さらに発展させられるべき」[fortzuentwickelnder] となっており、本全集のロシア語版、および1965年、モスクワ刊の英文『マルクス・エンゲルス書簡選』所蔵のテキストもヴィーン版と一致している。」（『全集』第36巻、100ページ）。

したがって正解の文章で読むなら「『アナクロニズム』であると主張するにいたったかのような印象」は払拭される。

そればかりか、エンゲルスはここでも社会主義像として国家社会主義は退けても、1882年の『共産党宣言』のロシア語版序文の立場にしたがって「近代共産主義の要素」が揺さぶって原始共産主義の共同体を「さらに発展させられるべき」ものとみなして共同体社会主義を支持していたのである。

そこでこれら国家社会主義についてのマルクス、エンゲルスの言説によっても、ソ連型社会主義を国家社会主義と規定するのは根拠のあることになる。

その二は、ほかならぬレーニンが10月革命前夜の諸文献が明証している通り、社会主義を国家独占的社会主義 = 国家社会主義そのものを把捉していたことである。それゆえ、1917年9月、小冊子「さし迫る破局 それとどう闘うか」でレーニンはいう。「社会主義は国家社会主義的独占からの次の一步にほかならない」、「社会主義とは、全人民の利益を自指すようになった、そしてその限りで資本主義的独占でなくなった国家資本主義的独占にほかならない」（『レーニン全集』第25巻、大月書店、385ページ）。「国家独占資本主義は、社会主義のためのもっとも完全な物質的準備であり、社会主義の入口であり、それと社会主義と名づけられる一段のあいだにはどんな中間的段階もないような歴史の階段の一段である」（同、386ページ）。

この「社会主義 = 国家社会主義」説は同時期に書かれた『国家と革命』においてはより明確に定式化されている。すなわち、そこではこういわれている。「問題とは資本家の生産手段を接収すること、全市民を一つの巨大なシンジケート（すなわち国家全体）の労働者および事務職員に変身させ、このシンジケート全体の仕事を一から十まで純然たる民主主義国家、すなわち労働者・兵士代表ソヴェトの国家に完全に服従させることである」（角田安正訳、ちくま学芸文庫、184ページ）、「共産主義社会の第一段階においては、すべての市民が武装労働者からなる国家に雇われて、その従業員と化するのである。すべての市民が国民全体からなる一つの国家『シンジケート』の事務職員、および労働者となるのである」（同、190ページ）。

そこでポリシェヴィキ党がこのレーニンの「社会主義 = 国家社会主義」論にもとづいて社会主義を建設してきたのであってみれば、ソ連型社会主義はまさしく国家社会主義を建設してきたことになる。したがって、スターリンが1936年、「憲法について」の報告において、社会主義の勝利を語ったのは、厳密には国家社会主義の勝利と捉えるならば正しいことになるのであって、和田氏がそれを「国家社会主義の完成」と表現したのは正鵠を得たものであったのである。

だが、ただちにいわなければならないのは、スターリン時代、「マルクス = レーニン主義」という用語が造語されたが、レーニン主義はマルクス主義ではないということである。というのはレーニンはおそらくブレハーノフの影響によって社会主義とは国家社会主義であると捉えたが、マルクスにあってはそうではないからである⁵⁾。

5) マルクス、エンゲルスとブレハーノフ、レーニンの社会主義は同一であるのか、相違があるのかという論点に関わっては、すでに拙稿「『資本論』の社会主義像——国家社会主義か、市場社会主義か、協同社会主義か（上）（中）（下）」（『立教経済学研究』第59巻第2号、第3号、第4号、2005年10月、2006年1月、3月）「ロバート・オウエンと『資本論』——『資本論』の社会主義像（完）」（『立教経済学研究』第60巻第2号、2006年10月）においてマルクスの社会主義像はアソシエーション社会主義 = 協同組合社会主義像であることを論定しておいた。したがってマルクスの協同社会主義像は——そしてエンゲルスも「ロシアの社会状態」でみたようにマルクスと同一の像をもっていたとすれば、エンゲルスのそれと——とブレハーノフ、レーニンの国家社会主義像とは決定的に相違する。

ブレハーノフ、レーニンが最重視する文献『共産党宣言』でも社会主義は国家社会主義とはみなされていない。『宣言』の「プロレタリアと共産主義者」は、労働者革命が「プロレタリアートを支配階級に高め」たあとの経済的任務について、こういつている。

「プロレタリアートは、ブルジョアジーからすべての資本を次々に奪い取り、すべての生産用具を国家の手に、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアートの手に集中して、大量の生産諸力をできるだけ急速に増大させるために、自分の政治的支配を利用するであろう。

このことは、もちろんさしあたっては、所有権、およびブルジョア的生産諸関係にたいする専制的な介入 (despotischer Eingriffe) によってのみ、こうして経済的には不十分かつ不安定と目される諸方策 (Maßregeln, die ökonomisch unzureichend und unhaltbar erscheinen) によってのみおこなわれうるのであるが、しかし、これらの諸方策は、運動の進行中に自分自身を乗り越えていって、生産様式全体を変革するための手段として避けられないものである。[.....]

発展の過程で、階級の差異が消滅して、すべての生産が^{アンソワールト}連合した諸個人の手に集積されると、^{ゲヴァルト}公的権力は政治的性格を失う。本来の意味で政治的権力は、一つの階級が他の階級を抑圧する

それでは資本主義から社会主義への移行過程の構想はどうか。マルクスの構想については拙稿「資本主義から協同社会主義への移行過程——古典家たちはいかに捉えていたか(上)(中)(下)」(『立教経済学研究』第60巻第4号, 第61巻第1号, 第2号, 2007年3月, 7月, 10月)「パリコμμン期の移行過程論——続・資本主義から協同社会主義への移行過程(上)」(『立教経済学研究』第61巻第3号, 2008年1月), 「晩年期のマルクスの移行過程論——続・資本主義から協同社会主義への移行過程(下)」(『立教経済学研究』第61巻第4号, 2008年3月)において解明してみた。それによれば資本主義から社会主義への移行過程もマルクスの描いたものとレーニンが描いたものとは決定的に相違したことになる。

なお、これに付随して述べておきたいこととして和田春樹氏が前掲『歴史としての社会主義』(岩波新書, 1992年)の「3 マルクス主義の強さと弱さ」の「貧弱なユートピア」においてマルクスのユートピアの貧弱さについて、以下のように記していることである。

「マルクスは社会主義社会についてのユートピアにはいかなる具体性も、イメージも与えなかった。むしろそうすることを峻拒したのである」(45ページ)。「マルクスがユートピアの難題を単純な楽観論ですりぬけている印象は否めない。その意味で言えば、マルクス主義はユートピア思想としては、むしろ後退を現していると言わざるをえない」(51ページ)。「だが、弱点もまた強みである。(.....)マルクス主義の強みは存在する資本主義社会、近代市民社会の鋭い分析批判にあり、対決的な政治的急進主義と世界史的使命観によって人々を困難な闘争に鼓舞する力にあった。社会主義ユートピアについて語ることが貧しかったことは、マルクス主義が現実改革の急進思想、近代化革命の急進思想として機能する可能性を与えたのである」(51-52ページ)。

ちなみに、この把握は「再編『歴史としての社会主義』(『ロシア研究』第68号, 2001年)においても強調されている。

たしかにマルクスは“青写真主義”は峻拒しているが、マルクスは、上記の連作論文で明らかにしたように、自らの社会主義社会像をもっていたのであって、社会主義への移行過程についても自らの認識を用意していたのであって、私見ではそれらは「貧弱なユートピア」の域を超えるものをもっていると考えている。

ための組織された強力である。^{ゲヴァルト}プロレタリアートが、ブルジョアジーに対する闘争において、必然的に自らを階級に結合し、革命によって自らを支配階級とし、そして支配階級として^{ゲヴァルトザーム}強力的に古い生産諸関係を廃止するときには、プロレタリアートは、この生産諸関係とともに、階級対立の、諸階級そのものの存在諸条件を、したがってまた階級としてのそれ自身の支配を廃止する。

階級および階級対立をもつ古いブルジョア的社会的の代わりに、各人の自由な発展が万人の自由な発展のための条件である^{アソツィアツィオン}連合体 (eine Assoziation) が現われる」(前掲, 84, 86ページ)。

この叙述のうち、前半の「すべての生産用具を国家の手に集中する」局面、「所有権、およびブルジョア的生産諸関係に対する専制的な介入」の局面は国家社会主義の局面といいうるが、それには二つの注釈が付されている。その一は、その局面は「経済的には不十分かつ不安定と目される諸方策によってのみ行われる」こと、その二は、それらの諸方策は「運動の進行中に自分自身を乗り越えていって、生産様式全体を変革するための手段として避けられないものである」とされていることである。

それゆえ、この国家社会主義の第一の局面では階級の差異は消滅するものの、生産様式全体は変革されていないので、いまだ本来の社会主義ではないのである。それでは本来の真の社会主義とはどのようなものか。それは後半の叙述で明らかにされる「すべての生産が連合した諸個人の手に集積」される第二局面、階級対立、階級支配、階級そのものがなくなるので政治的國家が消滅するアソシエーション社会主義 = 協同組合社会主義の局面である。

そこでこういうことになる。すなわちソ連型社会主義は、運動の進行中に自分自身を乗り越え、ることなく国家社会主義の第一局面は固着し停滞したシステムであって、真の社会主義像——アソシエーション社会主義 = 協同組合社会主義に到達することはなかったものであったということである。

しかもマルクスは国家社会主義の局面というのは「経済的には不十分かつ不安定」(エンゲルスによる英語版では「支えきれない」とみなしていたのであるから、その局面に固着し停滞するならば自壊するといっていたといえる。

したがってソ連型社会主義自壊の第二の原因は、それが国家資本主義の第一局面の固着・停滞してアソシエーション社会主義の第二局面を切り拓けなかったことになるといつてよいであろう。

スターリン主義の本質 = 共産主義仮説の論証にむけて

しかし、同じ国家社会主義といっても、1989年以降、東欧諸国のソ連型社会主義が民衆に見放され、普通選挙で相次いで敗北したのと異なり、当初からヒューマニズムにもとづく社会主義を志向したカストロ率いるキューバ型国家社会主義は1993年の県議会、および国会議員選挙で90%を超える国民が現政権を支持し、体制崩壊の危機を乗り越えたことにみられるように、

国家社会主義だからといって崩壊は必然的とはいえない。それゆえ、先にソ連型社会主義自壊の第二の原因として国家社会主義の固着・停滞を挙げたが、正しくは誘因というべきであろう。

それではソ連・東欧はいかなる国家社会主義であったがゆえに崩壊に至ったのであろうか。

この論点を考えるに当たって参考になるのは、藤田勇氏が提唱したソビエト体制を「第一次的構造」と「第二次的形成物」とに腑分けする方法である。藤田氏は「現存社会主義体制の歴史的位置」（藤田編『権威的秩序と国家』、東京大学出版会、1987年）において、この方法を提起されたが、近著『自由・民主主義と社会主義』（桜井書店、2007年）においても、この方法的枠組みを維持するとして、以下のように展述している。

「ここで体制の『第一次的構造』というのは、1930年代にソ連で造型され、1989～91年にこの型の体制が崩壊するまで約半世紀にわたって変容しつつ再生産され、中東欧・アジア『社会主義諸国』に拡大された『ソビエト型』体制の基礎構造を指し、『第二次形成物』とは、『第一次構造』の上に形成され、『第一次的構造』を包みながら、やがて『第一次的構造』のノーマルな機能経路そのものを破壊する現象、いわゆる『スターリン時代』に特有の現象で、この型の体制の内部改革によって除去されてゆくものを指す」（同、365～366ページ）。

ちなみに藤田氏は「第一次的構造 = 『ソビエト型』体制の基礎構造」を、次のようなものと捉えている。

「基本的生産手段が国家的所有および協同組合的所有（主として農業）の形態で全一的に社会化され（ソ連の特徴であるが革命期以降土地も国有化）、小商品生産的市場関係も基本的に一掃されて、経済活動全体が国家の集権的・指令的計画によって運営される体制。それだけでなく、工業における生産手段の社会化が国有・国家管理形態をとり、したがって、社会的所有諸関係が、『官僚制的諸関係』によって媒介されるという関係」（同、366ページ）。

この方法的枠組みは説明力に富み、秀抜であるがゆえに、和田春樹氏によっても採用され、和田氏はこの方法的枠組みを国家社会主義プラス「第二次構造物」というように所論に組み入れている。では、和田氏は「第二次構造物」をどう規定しているか。和田氏は前掲『歴史としての社会主義』において、キーロフ暗殺以来の国内旧反対派（トロツキー派、ジイヴィエフ＝カメネフ派、ブハーリン派——引用者）に対する不信に結びついて起こった大量抑圧＝「大恐怖」に関わって、次のようにいわれる。「この大恐怖によって国家社会主義のシステムも変容した。それまでの国家社会主義のシステムの上に恐怖の第二次構造物がつけくわったのである。その内容は、頂点におけるスターリンの個人独裁の確立であり、底辺における家族の公化である。そして外の敵の浸透に対する恐怖がシステム全体の結束帯となっている」（同、115ページ）。

藤田氏が「第二次形成物」を「スターリン時代に特有の現象」とされ、和田氏が「第二次構造物」を「スターリンの個人独裁の確立と家族の公化」に求められている点、異論はない。それゆえ、小論でも「第二次形成物」＝「第二次構造物」をスターリン主義に求めるとともに、

このスターリン主義という第二次的形成物・構造物こそソ連型社会主義の命脈を奪った当のものだと捉えたい。

それではスターリン主義の本質はどのように規定され性格づけられるものであろうか。

この場合、マルクス主義の立場にたつてこの問題を解明しようとするならば、問われるべきはマルクス、エンゲルスがスターリン現象と同質のものに直面したことがあったのか。あったとすれば、その現象をいかに把握していたかが顧みられなければならないであろう。まずいえることはマルクス、エンゲルスはスターリン現象と同質のものに直面し、それと仮借なく思想的・組織的・政治的に闘争したということである。ではスターリン現象と同質のものとはどういうものであったのか。それはマルクス、エンゲルスによるならば、統治レジームとしてはカッサーネン・コムニスム「兵営共産主義」、その権力行使の形態からはバクーニン主義 = ネチャーエフ主義と規定づけられるものである。

もっとも兵営共産主義についての先行研究はすでに存在する。ロイ・メドヴェーデフの『歴史の審判 スターリン主義の起源と帰結』（初版、1968年。邦訳『共産主義とは何か』、上・下、石堂清倫訳、三一書房、1973年 1974年）によると、ユー・カリーヤキンが著書『兵営共産主義との闘争におけるマルクス主義の伝統』において「独創的な分析とえせ共産主義に関するマルクスとエンゲルスの発言の要約を示している」（下、559ページ）という。しかし石堂氏が「編集者注」で「カリーヤキンの著書も、刊行されたとしても、刊行地が書いてない」（同、560ページ）と記しているように、原典は不詳である。これを受けてか、メドヴェーデフ自身も「スターリンの社会主義は、往年のマルクスとエンゲルスがあのように辛辣な態度をとったネチャーエフ式の兵営社会主義の多くの特性を実際、備えるようになった」（同、104ページ）と捉え、「スターリン主義 = 兵営共産主義」説を探っている。のみならずペレストロイカ期には和田春樹氏が前掲『これ以外の道はない』（邦訳『ペレストロイカ思想』）の「解説」で「兵営共産主義はほぼ1988年春からソ連の国内で一斉に使われ始めた用語」で「明らかに論者たちのニュアンスは『兵営共産主義』は社会主義ではないとするものである」（同、420ページ）と書いているように、ポピュラーな用語にまでなっている。

ちなみに、1985年春から一斉に使われ始めたという事情に預かっているのが、和田氏が前掲『歴史としての社会主義』で紹介しているように「ミハイル・カプスチンが雑誌『オクチャブリ』に『どういふ遺産をわれわれは拒否するか』というレーニンの論文（『全集』第2巻所収——引用者）と同名の論文を書いて、カプスチンがスターリン主義を『兵営共産主義』であったと規定した」（同、17ページ）ことであろう。

そして以上の流れを汲みとってか、和田氏は自らの国家社会主義を規定するさい、メドヴェーデフと同様、「兵営共産主義」を「兵営社会主義」といい変えて、以上のようにいわれる。「できあがった国家社会主義の体制は、(……)世界戦争に備える新しい総力戦体制の完成形態であった。それが、『兵営社会主義』の特徴を帯びたのである」（同、182ページ）。この場合、

「兵営社会主義」とはまた「スターリンの個人独裁の確立、家族の公化」を主たる特質とするものであるとすれば、和田氏は「第二次的構造物」を「兵営社会主義」にみていたともいえる。

そうだとすればソ連型国家社会主義の「第二次的形成物」=「第二次的構造物」は「兵営共産主義の完成」ということができる。

そこでこうみてくると、スターリン主義の本質=兵営共産主義はいわば通説的地位を占めている。とはいえマルクス、エンゲルスの兵営共産主義論とはそもそもどういうものか、なぜ、マルクス、エンゲルスの兵営共産主義論からすると、スターリン主義をそうしたものと規定しうるのか、その根拠は何かという問題に対しては、少なくともわが国ではいまだ問題の重要性に比して十分解明されているとは思われない。

そこでこの論文では、いま掲げた二つの論点に重点をおいて探求をおこなってみることにしたい。(未完)